

THE IDOLM@STER The Story of Admiral Lescher

アレクサンデル・G・ゴリアス上級大将

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

346が誇るギフトッド 一ノ瀬志希。彼女には史上最年少のアメリカ海軍元帥の親戚がいた。これはそんなウイリアム・レッツシャー提督とシンデレラ達の物語。

旧題「海軍大将ですが、親戚の同僚達とアイドルをしています。」

目次

I	プロローグ	
	プロローグ	1
	海軍大将、アイドルと「家族」になる	5
	海軍大将、キャラ付けする	10
	海軍大将、しぶりんと飛ぶ	15
	海軍大将、親友と再会する	21
	海軍大将、初仕事（何故かYOUTObe）に就く	41
	海軍大将、デビューする	48
	海軍大将、疫病神を拾う	55
II	The Star-Spangled Banner	
	海軍大将、決意する。そして元帥になる。	60
	海軍元帥、若返る	71
	海軍元帥、グラビアに挑戦する	80
	海軍元帥、運動会に引き摺り出される	94
	海軍元帥、年末年始の調整に入る	107
	海軍元帥、プロデューサーする	115
	番外編 親子、盃を交わす	120

I プロローグ プロローグ

ハワイ オアフ

米インド太平洋軍司令部

「閣下、30年間お疲れ様でした！」花束を渡す

「ありがとう。」受け取る

1ヶ月後

ワシントンD.C.

郊外

プルプルプル プルプルプル

ガチャ

「私だ・・・イマニシ、久しぶりだな・・・ああ。わかった。来週そちらに出向こう。良い酒を用意して貰えるのかな?・・・わかった。ではな。」電話を切る

更に一週間後

池袋駅東口

「イマニシ。」ハグ

「ウイリアム、我が友よ。」抱き返す

「とりあえず磯○水産で良いかな？君は魚が好きだったろう？」
「任せる。」

「では5年ぶりの再会に・・・乾杯！」カン
「・・・。」カン

「で、退役してのんびりしていた私を態々呼び出したのは何故だ？お前のような者が旧交を温めようなどと陳腐且つ平凡なことを考えているとは思っていない。」

「・・・そうだな。史上最年少の海軍大将を誤魔化そうとは私も思いもよらんところだよ・・・単刀直入に頼む。私の居る会社を手伝ってくれ。」

「手伝う？どういうことだ？」

「とりあえずは呑もう。詳しい説明は私の会社です。明日の朝に来てくれ。」

「わかった・・・このブリは美味しい。合衆国ではこうはいかん。」
「ブリが好きなのは相変わらずだね。じゃんじゃん頼むからどんどん食べてくれ。」

「ああ。」

翌日 346プロダクション 受付

「受付さんおはようございます。ウィリアム・レツシャー・イチノセ jr. という者です。イマニシ部長に面会したい。」

「畏まりました。少々お待ち下さい。」

「おはようイマニシ。言われた通り来たぞ。」

「ああ。こっちのソファにかけていてくれ。もう少しで終わる」書類整理中

「さて。友よ。お願いだ。私の会社に就職して私の手伝い・・・アイドル達・・・シンデレラプロジェクトの子達をプロデュースしてやって欲しい。」

「他ならぬお前からの頼みだ。聞いてはやる。だが私とて退役したが海軍大将。いつホワイトハウスかペンタゴンに呼ばれるかわからん。それに日本のメディアにも専門家として出演依頼がひっきりなしに來ている。それを承知の上で雇うなら私に文句は無い。」

「ありがとうウィリアム、助かるよ。で・・・ここからはあくまで『提案』だ。『頼み』ではないから必ずしも聞く必要は無いが、とりあえず耳に入れてくれ。」

「？」

「ウィリアム、アイドルにならないか？」

「断る」半ギレ

「とりあえず聞いてくれ。今男のアイドル需要が伸びてきているん

だ。我が346もその波に乗りたいし常務のシンデレラプロジェクト予算の削減の意向を崩したいのもある。君以外にはできん！頼むよ！」

「・・・声はともかく私の見た目は女だ。それに私自身は別に良いが私に恥をかかせた場合大統領を怒らせることになるが、良いのか？幾ら天下の美城グループといえど高々一企業でしかない。大統領に睨まれては無事では済まんぞ？」

「私の博打が上手くないかなかった試しが無いことは君とてよく知っているだろう？」雇用契約書を差し出す

「今まで上手くいったからといってこれからもうまくいくとは限るまい。だが、お前の博打に何度も救われてきたのは事実だ。お前の顔を立てて・・・やってはやる。だが何度も言うがあてにはするなよ？」署名する

シンデレラプロジェクトからファンの皆様へお知らせ

44歳のアイドル爆誕！続報を乞うご期待！！

海軍大将、アイドルと“家族”になる

レツシャール大将のウワサ②

第5空母航空団司令時代に今西部長に寒ブリを食べさせられて以来基本ブリの刺身以外の生魚はほとんど口にしないらしい(加熱した魚なら他も食べるが)。

「諸君、おはよう。」

「「おはようございます、今西部長！」」

「まずは紹介しよう。諸君の新しいプロデューサー 兼 同僚になるウイリアム・レツシャール・イチノセ jr. だ。ウイリアム、挨拶を。」
「わかった。はじめましてシンデレラプロジェクトの諸君。ウイリアム・レツシャール・イチノセ jr. だ。前職は海軍大将、アメリカ太平洋軍司令官の任を大統領から任されていた。そしてそこまで近い血縁でもないが一ノ瀬志希の親戚だ。趣味は空を飛ぶこと。アイドルとしては新米だが組織管理と人生相談、トレーニングには自信がある。レツシャールあるいはウイリアムと呼んで欲しい。プロデュース及び指導方針として

- ・ 正しいことをする勇氣、間違ったことをしない勇氣
- ・ ずっと共に

を掲げるものである。何かあれば忌憚無く意見すること。

以後宜しく。」

「「宜しく願います！」」

「とりあえず挨拶は済んだね。では新しいプロデューサーとシンデレラプロジェクトの諸君は今日1日は交流の時間にするから存分にコミュニケーションを取ってくれたまえ。じゃ私は失礼。」

「では諸君の自己紹介を聞こう。履歴書は確認したが、それだけではどうにもならん。ではまずは・・・渋谷さん。」

「私？まあ良いけど・・・渋谷凛、15歳。宜しく。」

「しぶりんもうちよつと何か言わないと・・・。」

「凛ちゃん男の人にそんな素っ気ない態度は駄目だよ？」

「・・・いや構わない。ありがとう渋谷さん。」

「・・・うん。」

「次、島村さん。」

「はい！島村卯月、17歳、趣味は友達と長電話です！」

「何か好物とかは無いのかな？」

「お魚全般が大好きです！」

「そうか、私も魚が好きだね。君とは良い酒が呑めそうだ。成人したら一杯やろう。」

「はい！ありがとうございます！」

「次、本田さん。」

「はい！本田未央、15歳、趣味はショッピングモールをまわることです！宜しくお願いします！」

「うん、宜しく。良ければ今度連れていってくれないかな？引越してきたばかりで家電製品が足りていないのだ。」

「わかりました！後でスケジュールを確認しましょうプロデューサーさん！」

「うん・・・次は多田さん。」

「多田李衣菜、17歳！ロックなアイドル目指していますので、宜しくお願ひします！」

「私はロック全般が好きなのはB'zとQueenはよく聞いている。Queenに至っては概ね揃えている。Queenを後日共に語ろうではないか。」

「プロデューサーさんQueenが好きなんですネ！一緒にお話ができる同志は大歓迎です！」

「うん、ありがとう・・・次は前川さん。」

「はいにや！前川みく！15歳！魚以外は何でも食べれるにや！Pちゃんこれから宜しくにや！」

「ああ、宜しく。魚が駄目なのか？好き嫌いはよくない。United States Navy式“修正”と“制裁”を後でくれてやろう。魚に敬意を払うようになるまで徹底的にな。」

「うわあPちゃんが怖いにやー！李衣菜ちゃん助けてにや！」李衣菜の後ろに隠れる

「まあ“制裁”はともかく“修正”は後できつちりやるが・・・次は新田さん。」

「はい！新田美波、19歳です。資格を取るのが趣味です。宜しくお願ひします！」

「宜しく。来年成人かな？」

「はい。」

「では来年もここにいたら祝ってあげよう。君が強いことを祈っている。今まで317回呑み競争したが負けたことが無くてね。そろそろ負けたいんだがな・・・アナスタシアさんは風邪で欠勤。各種準備は明日にまわそう・・・次は諸君が私に質問したまえ。軍事機密以外なら答えよう。」

「「はいー！」」 挙手

「島村さん。」

「はい。プロデューサーさんは男の人なのになんで軍人さんになったんですか？」

「3歳の頃に海軍の航空ショーを見てね。それでパイロットになろうと思ったのだ。幸い私は一ノ瀬家の人間だった。全ての学校を飛び級で卒業しアナポリス海軍兵学校に入ることなど造作もない。本来アナポリスには17歳以上でないと入れないが論文4つと飛び級の実績で（脅して）10歳で入れて貰い14歳で卒業し海軍のパイロットになった。」

「なるほど。」

「ちなみに島村さんの教科書に書かれている湾岸戦争にも当時まだ大

尉だったが従軍している。イラク軍の火砲陣地に爆撃したりバンカーバスターを地下施設に投下したりイラク軍の戦闘機を墜としたりもした。当時は騒ぎになったね。『士官とはいえ年端もいかぬ男を戦場に出すのか』とな。私は取材でこう言った。『やりたくてやってんだ！文句あんのか？』とな。」

「プロデューサーさんはそこまでして空を飛びたかったんですね！」

「そう。今はこそ退役した私だがプライベート機を持っていていつでも飛べる状態で羽田に預けてある。気分が優れない時は飛んでスッキリさせているんだ・・・他に質問は？」

「・・・」黙って挙手

「渋谷さん。」

「プロデューサーってさ、44歳だけど・・・踊れるの？杖ついてるけど？」

「心配は無用だ。これはあくまで補助だ。本気になったら要らないからな。」

「ふくん・・・今Wikipediaで見てただけだし、プロデューサーって独身なんだね。」

「!?!」一同驚く

「今カノジョとかつていないの？」

「いないな。私は良き軍人にはなれたが、良き夫にも父にもなれないような奴だからな。意図的に作らないようにしている。」

「?..?」

「私の両親は私が4歳の時に交通事故で死んだ。ろくに親から教育を受けずに生きてきた私に夫も父も務まろう筈がない。同期の皆からよく言われたものだ『パイロットとしては超一流だが恋人としては40点』とな。『軍人』としてはチームワークがあろうとも『私人』としてはダメダメだったということだな。その点志希とてチームワークが壊滅的なのは同じだ。一ノ瀬家の者は才能はあるがチームワークなど無い。正直よく祖国が一ノ瀬家の者を公務員・・・しかもチームワークが最重要な要素であるUnited States Navyで30年も勤務することを許してくれたと思うよ。」

「……。」

「諸君に予め警告しておく。私は面倒くさい男だぞ。恋愛対象にしない方が良く。それに小さい頃から放射線飛び交う高高度を30年飛び続けた結果私の身体は放射能まみれだ。この身体は長くはもたない。医者いわくあと10年生きられれば良い方らしい。残る者を悲しませたくないのだ。」

「……。」

「だが私はイマニシから引き受けた以上諸君の側にずっといなければならぬ。そこでだ。」写真と地図を出す

「諸君は現在寮で暮らしている。そこを引き払い、池袋のここにある私の別荘で共同生活をして貰う。プロデューサーによっては仲間同士で競わせたりする者もいるようだが、私は軍人だ。競わせたりはしない。軍の組織工学に基づき組織の秩序維持とチームワークを旨とするプロデューサーをしていくつもりだ。我々は互いを補い労り合い強い絆に基づき『家族』になるのだ。まずは堅実にやっていくことだ。挑戦するのは後で良い。何か質問は？」

「……。」シーン

「では今日の予定が終わり次第各々の判断で手持ちの荷物を持って我々の拠点になる『家』に行くぞ。既に諸君の家の物はイマニシを脅して移動させているし、鍵も渡しておく。」鍵を配る

「共同生活である以上家事も分担して互いの負担を軽減する。当番制にするのも一つの手段だ。詳細は家を見て貰ってからにするが……ついでに唐突だが諸君に相談したい。」

「……。」

「アイドルはキャラ付けが重要な要素だとイマニシから聞いている。私のキャラだが……どうするべきだろうか？」

海軍大将、キャラ付けする

シンデレラプロジェクト

所属アイドル一覧

- ・ 島村卯月
- ・ 渋谷凪
- ・ 本田未央
- ・ アナスタシア
- ・ 多田李衣菜
- ・ 新田美波
- ・ 前川みく
- ・ William・Lescher・Ichinose jr.
- ↑クリツク

William・Lescher・Ichinose jr.
ウイリアム・レッシャー・イチノセ ジュニア

・ 元アメリカ海軍大将。前 アメリカインド太平洋軍司令官。アイドル部門統括責任者である今西弘之部長のスカウトで入所。シンデレラプロジェクトのプロデューサーとアイドルを兼務する。

略歴

- 1985年 アメリカ海軍入隊
- 1991年 第31戦闘攻撃飛行隊
- 1992年 特殊作戦軍
- 1993年 海上自衛隊幹部学校付
- 1994年 第5空母航空団司令
- 1995年 統合参謀本部事務局 要員・人事部門
- 1998年 航空母艦 ジョージ・ワシントン 艦長
- 2000年 第3艦隊参謀長
- 2002年 第5空母打撃群司令官

2004年 統合参謀本部付（特殊部隊・テロ対策）
2006年 アメリカ太平洋艦隊副司令官 兼 参謀長
2008年 第7艦隊司令官
2010年 海軍法務総監
2011年 アメリカ太平洋艦隊司令官
2012年 アメリカ太平洋軍司令官
2015年7月1日 退役
2015年9月1日 当プロダクション入社 シンデレラプロ
ジェクト担当プロデューサー（アイドルも兼務）

アイドルからの一言

「私は30年間の軍務で持つて合衆国への義務を果たしました。次は敬愛していた亡き祖父の祖国たるこの国で精一杯働く所存です。またプロデューサー及び指導方針として

- ・正しいことをする勇氣 間違ったことをしない勇氣
- ・ずっと共に

を掲げ、新米ながら業務に邁進致します。普段中々皆様の目に触れない私達の活動の裏側ですが、本ホームページでその一端に触れていただき、益々の叱咤激励をいただければ幸いです。」

2015年9月15日 William・Lescher・Ichinose jr.

「プロデューサーさんのキャラ付け。」

「君達に決めて貰いたいのだ。私は今まで何度も主体的に決断を下してきた。たまには他の者に任せてみたいし、イマニシが信じる君達を信じて委ねる意味もある。」

「じゃあ尚のことちゃんと考えてキャラ付けしないといけませんね！」

「うーん、そもそもプロデューサーさんは何か希望ってありますか？」

「イマニシがアドバイスしてくれたが、私は志希と違いクールでやっていきたい。それ以外は何も無い。」

「じゃあ、ここは王道で行こうよ！」

「王道？」

「しぶりんみたいな飄々としたクール系で売り出していくんです！」

「飄々としたか。本田さんには申し訳ないが何か違う気がする。」

「うーん・じゃあ奏さんみたいなミスティアス系クールとかどうでしょう？」

「新田さん、私は少佐の頃のある1年間以外隠してだてするものなど無い。ミスティアスキャラなど自滅して終わるだけのような気がしてならんのだが。」

「ですけどプロデューサーさんは表情があまり変わりませんからできなくもないと思います。後はそれらしい行動と言動でカバーできますよ?どう演じるかは奏さんに聞いて参考にすれば良いですし。」

♪目と目が逢う 瞬間好きだと気づいた 「あなたは今どんな気持ちでいるの」♪

「失礼。」電話を取る

「!?!」

「Hello! It's been a long time, my friend.

I'm currently working in 346 productions.

Don't be crazy! Sure, I would normally have wanted to help you, but you're an adult, right?

And I owe it to an executive at 346 Productions. Must be Give back. Please understand.

When can we meet next time?

Understood.

I'm going to that your company
day after tomorrow.
Call Yuto. Let's have a meal
while talking about silly things
with three people like in the past.
Don't worry about transport at
ion why I'll pick you up.
See you again.」ピツ 電話を切る

「プロデューサーさん今の電話は？」

「親友とテイナーの予定が入った。明後日は休むとイマニシに言っておかないとな。」頭を掻く

「今の着信音って765の如月千早さんの曲ですよね？」

「そうだ。彼女に敬意を表し第7艦隊司令官になって以降はずっと着信音にしている。」

尤も、チハヤとユウからの着信専用だがな。他の者からの着信音は違うものに設定されているのだ。

「それよりプロデューサーさんのキャラ結局どうするんです？」

「できるかどうかかわらんが、やるだけやってみるとしようか。」ミス
テリアス系スクールアイドル”をな。もう失うものは何もない。しく
じってもイマニシの手落ちになるだけのことだ。」

大統領・ベスのやつがブチ切れて美城グループに報復するかもしれんが、今は言う必要は無いだろう。

池袋 ウィリアムの別荘

「諸君、ここがこれから暮らす我々の”家”だ。各種トレーニング

ルームも諸君が暮らす部屋も防音壁付きで完備している。このリビングを中心にこつちがキッチン、トイレ、風呂、洗濯室だ。」

「プロデューサー、これは？」

「型落ち故に廃棄寸前で可哀想だったから私のポケットマネーで引き取った我が海軍の戦闘機シミュレーターだ。一緒に飛んでみるか渋谷さん？」

「うん。エースコンバット全部やりこんだ腕を見せてあげるよ。」

「ほう。ならデイナーの後に期待させて貰おうか。」

海軍大将、しぶりんと飛ぶ

渋谷凜のウワサ①

エースコンバットシリーズを全て持っている（全てクリア済み）らしい。愛機はF/A-18（E）Fスーパーホーネット、好きな特殊兵装はEML（本気の時以外使わない）らしい。

レッシャー大将のウワサ⑥

特殊部隊にいた時に声真似のスキルを取得した結果大抵の声を真似できるらしい。

「諸君、どうだろう私の夕食は？」

「プロデューサーこれ本当に鶏ムネ肉？全然パサパサしてないけど？」

「工夫一つでパサパサさせずに鶏ムネ肉は調理できる。尤も、我々はアイドルだ。皮は剥がして調理したからもの足りんとは思うが我慢してくれ。」

「そこまで私達は文句は言わないよ。」

今日の夕食は鶏ムネ肉のタンドリーチキンとカレー（アイドル用にスパイスだけのルーと肉は鶏ムネ肉を使う）、海藻サラダだ。

「再来月にはここににいる者だけでライブをやるよう先程イマニシから指示があった。場所は埼玉県のショッピングモール、コクーンシティだ。中庭を借りてひとまずやってみるようイマニシから言われた。小規模だが初ライブだ。堅実に、自分を見失わないよう頑張っとう。」

「二はいー！」

「尚初ライブでは入場料は取らないが、来週収録するアルバムや関係グッズを販売して収入にする。一番アルバムが売れた者にはシャトー・ディケムの85年物を景品に出すぞ。」

「プロデューサーさん、シャトー・ディケムって何？」

「ああ説明していなかったな。端的に言えば私の好きな白ワインだ。」

私が海軍に入った年に作られた85年物は日本円で大体20万円の相場になるか。」

「に 20万!?!」

「そんなに驚くことか。諸君はこれから大いに稼ぐのだ。その位で驚くな。それに私は多額の資産を持っている。この程度どうということはない。」

「不躰ですがプロデューサーさんの資産はおいくらなんですか?」

「約200億ドル、2兆円と少しだな。」

「2兆!?!」

「桁が違う。」

「一ノ瀬家の者は皆何かしら副業をやっている。それだけの才覚があるのだからな。私も投資家をパイロットの傍らやっている。まあそれは良い。とりあえずここから君達はのしあがっていくのだ。最終的な目標は4年以内に我が合衆国のサン・デビル・スタジアムで我々のみでライブをやることだ。中期目標としては再来年末までにハワイでイベントをやる。初期目標は我が第7艦隊及び日本の何処か公的機関から慰問ライブの注文を受けることだ。それと”家族”だのなんだの言っておきながら申し訳ないが埼玉でのライブまでの間だけは私は君達とレッスン・トレーニングは受けない。独自に鍛える。」

「!?!」

「君達は正直目の前にいる男のプロデューサーとしてはともかくアイドルとしての才覚は疑ってしよう。無理もない。杖をついた老人だからな。師事する者にもあてがある。それにこういうことはもったいぶったほうがありがたみがあることを私は20年前身をもって学んだ。心配は無用だ!海軍大将をナメて貰っては困る。」凄みのある
笑み

「さて。早速だが渋谷さん、一緒に飛んでみよう。このシミュレータは海軍向けだ。アドバーサリー（教導隊）としてのF-5、F-16以外にF-14、F/A-18が使える。どれに乗る？」

「F/A-18F一択だよ。ずっと乗り続けてきたんだからさ。」

「では私は後部座席でWSO（兵装システム士官）をやる。思うように飛んでみると良い。発艦から軽い制空戦闘、JDA MによるCAS（近接航空支援）、そして着艦だ。できるかな？」ヘルメットを渡す
「やって見せるよ。」ヘルメットを被る

「TACネームはどうする？」

「プロデューサーが決めて良いよ。」

「ビグルスだ。」

「了解。」

「私のTACネームはコメントだ。だが機長は君だ。私のことは気にしないで良い。」

「わかった。」シミュレータに乗り込む

らしくないな。私が感傷に浸り、あまつさえ亡き者の渾名をそっくりだが赤の他人である者につけるとは、彼女がお前に似ているからか、すまんビグルス。お前が戦死して2、3年経つがやはり私はお前を忘れない。渋谷さんはお前によく似ている。

「行くぞー！」

「OK・ギアアップ。」

「マスターアームON、マスターアームON。異常なし。高度4000まで上昇。」

「相棒へバディ、敵戦闘ヘリだ、撃ち落とせ。」

「ラジャー。ビグルス フォックス2！（ミサイル発射 僚機は注意せよ）」

「ビグルス、SAM（地上発射対空ミサイル）だ。回避！チャフ！」

「爆弾投下。」

「ミッションコンプリート。RTB（母艦に帰る）。帰るよコメット。」
「Roger。」

「相棒へバディ、僅かに逸れてる。残り3マイルで修正しろ。」

「ラジャー。フックダウン。ポールを確認。着艦する。パワー、パワー。」スロットルを上げる

「よし、着艦！」ドスン

「見事だった。私が現役の時に出会ってたら一緒に飛びたかったと思う程だ。良いフライトを見せて貰った。ありがとう渋谷さん。」ヘルメットを脱ぐ

「うん。こちらこそ。」手を差し出す

「。」握手

「それとプロデューサー。これからは名字じゃなくてさ、さつきみたいに相棒へバディって呼んでよ。なんかそっちの方がしつくり来るからさ。」

「私には今まで四人の相棒がいた。が、全員戦死した。そういう意味では私は死神なのだ。それでも呼んで良いというのなら相棒へバディと呼ぶ。君はそれほどの腕を持っていた。」

「大丈夫だよプロデューサー。私は死なないから！」ウイリアムの肩を叩く

「。なんかプロデューサーさんと凜ちゃん雰囲気良いね。」小声

「ちよつとまずいですよ。このままじゃプロデューサーさんが凜ちゃんのお餌食に。」小声

「大丈夫。まだまだ巻き返せるって。」小声

■ 2300 ウィリアムの別荘 ベランダ

「■。」電話をかける

■ プルプルプル プルプルプル ガチャ

「もしもし、私だ。久しぶりだなミホ。お前の力を借りたい。キョウコも呼び出せ。来週からこちらに移れるよう手配した。荷物をまとめておけ。待っているぞ。」

海軍大将、親友と再会する

765プロダクション 本社前

チハヤとユウはこんな小さな会社で働いているのか。躍進している会社だと聞いていたがこれでは零細企業のオフィスではないか。まあそんなこと言っても始まらない。とりあえずチハヤに会わねばな。

プルプルプル プルプルプル ガチャ

「Good morning my friend. It's me. I, under the 765 production, so come pick me up.」ガチャ

「ウイル！」抱き着く

「チハヤ。」抱き締める

「お久しぶりです。10年ぶりですが変わりませんね。」

「お前は本当に大きくなった。私は衰える一方だ。もし何かあったらチハヤに介護してもらわないといけないかもしれないな。」

「勿論です。ウイルのことは優と一緒に支えますから！」

「ありがとう友よ。早速だがレッスンを見て貰えるかな？」

「はい。ウイルを1ヶ月で一流に育てるプランを優や皆で立てました。」

「ありがとう。」

「まずはウイルの今の实力を見ます。劇場〈シアター〉に行きましよう。優が待っています。」

「よし。車に乗れ。」

「おーいみんなー！千早が彼氏連れてきたぞー！」

「！！！！」

「765プロダクションでは私はチハヤの彼氏扱いなのか、ユウ？」手を出す

「お久しぶりです、ウイル。響さんが煽っただけですからお気になさらず。」握手

「チハヤが望むなら私はそれでも良いが。」小声

「それ言っちゃったら姉ちゃん発情しちゃいますから自重して下さい」小声で注意

「あ ああわかった はじめまして765プロのアイドルの皆さん。

私はウィリアム・レツシャー・イチノセ ジュニアだ。いつもチハヤとユウが世話になっている。これは差し入れだ。」ウイスキーと白ワインとシチリア産オレンジジュース3本ずつと生ハム丸々2本

「こんなにたくさん・ありがとうございますウイル。」

「いや、そもそも私とチハヤはこれから商売上の敵同士となるのだ。であるにも関わらず私を快く受け入れてくれたチハヤと765プロダクションの各位には感謝せねばなるまい。この程度の差し入れではむしろ不足だろう。」

「僕達はウイルが765プロに新しい刺激を与えてくれると思ったからレツスの申し出を快諾したんです。765プロとウイルの利害は一致しているんですから気にしないで下さい。」

「ユウがそう言うならそう考えておく・それより会社の幹部達に挨拶したい。会わせてくれるか？」

「社長は先程『築地で面白いものを見つけたから買い物してくる』とお出かけになり僕以外のプロデューサーの方々も挨拶回りで夜まで帰ってきません。事務の方々も諸事情により席を外しています。事務方を兼任するアイドルの方々も撮影に出かけました。とりあえず姉ちゃん達にレツスを見てもらってはいかががでしょうか？」

「わかった。そうさせて貰おう。チハヤ、頼めるか？」

「はい。」

「ユウ、このCDを頼む。イマニシの部下が私の為に作ってくれた曲の音源だ。当然まだ私はレコーディングしていないし発売もしていない。お前達姉弟とここにいる者だけが初めての聴き手だ。頼むぞ。」

「ありがとうございますウイル。耳かっぼじってちゃんと聴きますよ。」

It only takes one lone soul
It only takes one in a thousa
nd
The absence of fear in your e
yes
No, that's not bravery
As children we learn it, wro
ng
to put out the light of anothe
r
Our innocence lost over time
Means to an end
It's hard to hold your head u
p high
But we must try

ひとつの孤独な魂だけが選ばれた

幾千の魂の中から

お前の眼に恐怖はない

だがそれは勇気ではない

学校で私達は学んだ

他の人の命の光を消すことは間違いだ

時の中で失われた僕らの潔白は

ひとつの結末に導かれた

うつむかずにいるのは難しい

でも努力しなければならぬ

Sway together in the dark

It's supposed to be

'Cos I want to know the end

and you never ever need to fi

ght

But you're fighting every day

And I don't know when your li

ght will go out

Innocent crying child

The heart of your enemy

闇の中をともに戦おう

私達が予期していたように

私は結末を知りたい

お前がもう戦わなくてもいいように

でもお前は来る日も戦い続け

私は君の命がいつ尽きるかも知ることができない

泣き続ける無垢な子供が

お前の敵の心にもあるというのに

My heart to heart with the li

ght

and we always get along

Counting the stars in the sky

thinking why they have to die

Just face to face we can hear

a voice telling us it's wrong

C o u n t i n g t h e s t a r s i n t h e s k y
I t w a s l i k e a l u l l a b y

私の心と光を持つお前の心

それはいつも一緒にいた

空の星を数えながら

お前がなぜ死なねばならなかったのかと考えながら

面と向かってでなければ

それが間違いだと告げる声は聞こえない

その声は空の星を数え続ける

まるで子守歌のように

F o r s u n s e t s I ' l l b r e a k t h e r u
l e s

W e l e a r n t p l a y i n g d o w n i n t h e
h e a t h e r

T h e s e c r e t s b e h i n d a l l t h e v e
i l s

W e j u s t u s e o t h e r w o r d s

F o r f r e e d o m w e m a k e o u r c h a r g
e

F o r f r i e n d s h i p w e b a r e d o w n o
n o t h e r s

C a n ' t o n e o f y o u j u s t c a l c u l a
t e

T r a n q u i l i t y ?

夕日に向かって私達は掟を破った

私達はかつて草むらの中で遊びながら知った

全てのベールの向こうの秘密を

私達はもう嘗てのように話すこともできない

私達が自由の対価を支払うために

友情と祖国の為に敵を殺す

だれか教えてくれ
友の死を対価に祖国に平和は訪れたか？

It's hard to hold your head u
p high
But we must try
Sway together in the dark
It's supposed to be
'Cos I want to know the end
and you never need to fi
ght
But you're fighting everyday
And I don't know when your li
ght will go out
Innocent crying child
The heart of your enemy
Sway together in the dark
It's supposed to be
'Cos I want to know the end
and you never need to fi
ght
But you're fighting everyday
And I don't know when your li
ght will go out
Innocent crying child
The heart of your enemy
My heart to heart with the li
ght
and we always get along
Counting the stars in the sky
thinking why they have to die

Just face to face we can hear
a voice telling us it's wrong
Counting the stars in the sky
It was like a lullaby

「凄い。本当に素人なのこの人？」

「美希さん、ウイルはカラオケは好きでしたが最近までアメリカ海軍大将でした。練習する時間なんて現役時代そんなにあつたはずがありません。そんな中でこの声量です。やっぱり美希さんのような天才肌なタイプなんだと思います。」

「大切な人を亡くした者、そして私の今まで死んでいった戦友達のために歌う鎮魂歌へレクイエムだ。私が作った歌詞に346の作曲者が曲調を付けてくれた。練習など一切していない状態の微妙なものだった聞いてくれて感謝する。」ヘッドホンを外す

「ウイル、本当に練習していないのですか？」

「中東にいた頃声真似の練習をしたのもあって喉には自信がある。例えば菊地さんの声なら。」喉仏を押し戻す

「『菊地真、18歳。趣味はスポーツ全般です。よろしくお願ひします!』といった感じにな。どうかな、似てただろう?」

「!?!」

「真そっくりでしたね。流石ですウイル。それはSEALs時代に得た技術なんですか？」

「そうだ。軍機につきこれ以上は聞くな。」

「わかりました。歌唱力は問題無いと思います。でしょ姉ちゃん?」

「問題無いと思うわ。問題は踊れるかどうかね。」

「一度手本を見せてくれ。まずはそれを覚えて真似する。では動きやすい服に着替えるか。」ネクタイを取る

「ウイル?!」

「どうしたチハヤ?」

「私達がいるのに着替えちやうんですか?!」

「私はパイロットであつたしSEALsの一員だつた。女性の上官同僚部下と寝食も風呂も戦闘も共にしていたんだ。全ては今更だ。見られて困ることなど無い。」スーツを脱ぎ始める

如月千早 side

はあ。この人は史上初めて日系で且つ男性でアメリカ海軍大将にまで昇り詰めた天才。天才だからこそ普通の男性とは違う価値観で動いている。ご両親から情操教育を受けずにきたのもあつて昔からガードが甘いところがあつた。ほら、案の定皆が獲物を見る目でウイに狙いを定めてる。

「皆、見るのは百歩譲つて良いにしてもウイルを襲つたりしないで！それをやった途端346プロとアメリカ大統領を同時に敵にまわすことになるから！」

「346はわかるけどなんでアメリカ大統領まで敵にまわるんだ千早？」

「ローレン大統領とウイルは学校の同期で親友。今も緊密に連絡を取り合う仲なの。そのウイルが765プロのアイドルにレイプされたなんて聞いたら。」

「まあそうなる前に問答無用でぶちのめすがな。ユウ、説明してやれ。」

「皆さん、ウイルは23年前アメリカ海軍特殊部隊Navy SEALsに所属していました。先月イスラム系テロリストの指導者がアメリカ海軍特殊部隊に殺害されたことがニュースになったのは覚えてますか？」

「言われてみればそんなことがあつたようなな。」
「その作戦を主導したアメリカ海軍特殊部隊というのがNavy SEALsなんです。陸海空どこでも戦えるエリート部隊です。志願して訓練所に入ったとしても合格率はたったの約20%。2年半の地獄の訓練を潜り抜けた者だけが入れるんです。ウイルは世界初

の男性戦闘機パイロットとしての面ばかりメディアに注目されがちですが、世界初の男性特殊部隊員でもあるのです。」

「故に、そこらの痴女など即座に返り討ちにできる。中佐の頃30人近い半グレ集団にレイプされそうになったが、漏れ無く素手だけで全員半殺しにしてやった。私の後ろに立たないことを勧める。生命の安全は保証しない。」着替えた

「まあ誘うようなアクションをするウイルスにも問題がありますよ。」
「わかっているともチハヤ。だが30年ずつとこんな感じでやってきたのだ。今更変えられん。」

「よくそれで現役時代襲われずに済みましたね。」

「あいつらは私を引き取るとどうなるかよくわかっていた。『何事にも報いを』をモットーとする合衆国屈指の敏腕政治家・今の大統領である我が友エリザベス・ローレンを敵に回す上、放射能まみれで老い先短い私を引き取ったら100%未亡人になるのが目に見えている。ならば他をあたろう。』となる訳だ。合衆国軍人はエリートだ。夫を迎えることは決して難しくない。わざわざリスキーな私を引き取ったりはせんよ。いわば鑑賞用の薔薇だったのだ。私の話はどうしても良い。ダンスのレッスンをして貰いたいのだが。」

「姉ちゃん、誰が教えるの?」

「まずは私が教える。で問題なかったら美希にやって貰う。」

「だそうですから美希さんお願いします。」

「わかったの!」

冷や冷やするから扇情的な格好はやめて欲しいのだけれど

海軍大将をナメて貰っては困る。一回見ればコピーは容易だからな。チハヤのダンスも次の星井さんのダンスも難なくやって見せた。

「凄い・おっさんミキミキのダンスも完全にコピーしてますな。それにしても滴る汗がえっちいですな。」

「ですな。」

・双海姉妹よ。老人の汗なんぞに欲情しないで貰いたい。オイ、今私を『おっさん』トヨンダナ・ブチノメスカ

「バキバキバキ 首と指を鳴らす

「ん？あ しまった！ウイル！」レッシャーを後ろから拘束する

「ユウ、止めるな。コイツラワタシヲ『おっさん』トヨンダ」ブチ切れ

「真美さん亜美さん逃げて下さい！」

「え？え？どうしたのおっさん？」

「コロス」。アーミーナイフを取り出す

「うわあー火に油を注がないで下さい真美さん亜美さん!!」

「え？まさかそんなにおっさん呼ばわりが嫌だったの？」

「You, I'll be executed for insulting a superior officer, you goddamn kids!! Are you ready for this?」

「ヤバイヤバイヤバイ！ウイルが本気で怒ってる！姉ちゃん助けて！」

「もう！ウイル！」

「すまなかつた。」正座

「いや、ウイルの発作を忘れてた僕の責任もあります。真美さん亜美さん、次からはさっきの呼び方以外でお願いします。ウイルはさっきのように呼ばれるのが何より大嫌いです。ですがいきなりアーミーナイフを出してくるとは思いませんでしたよウイル。」

「自衛用に常に携帯している。無論日本の公安委員会から許可を得てな。私は多くの情報を握っている。他国の工作員にちよつかいをかけられても大丈夫なようにな。最初護衛が付けられそうになつたが断つた。自由にやる為にな。それより私のダンスだがどうだった、チハヤ？」

「完全に私とミキのコピーでしたから単純に腕前は問題ないと思います。ですけど。」美希を見る

「大将のダンスは中身がないとミキは思うの。それじゃファンは集まらないの！」

「一つ課題が見つかったな。ここにいる諸君はチハヤ同様強い信念があつてアイドルをやっている。だが私は違う。旧き友の手伝いの為に何気なくアイドルを始めただけだ。それでは駄目なのだな。」
中身が無いとな。二人ともありがとう。重要なことに気付くことができた。」

軍人が信念を持つことは許されない。何故なら戦争は信念が一つの原因になることがあるからだ。その点私にはプロフェッショナルとしての信念はあつても合衆国軍人としての、アメリカ人としての信

念など皆無であった。だからこそ冷静さを買われて海軍大将にまで昇ることができた。が、ここは信念が重要な要素を占めるアイドルの世界。何故アイドルをやっているのか。信念を持たねばやっていけないだろう。

1600

「行くぞチハヤ、ユウ。」車のエンジンをかける

「はい！」乗り込む

「今日はありがとう765プロダクションの諸君。これからも世話になるかもしれないが、その際は宜しく願います。それと社長達に宜しく言っておいて貰いたい。」

「わかったの。大将も頑張ってるね。ミキ達は応援してるの！」

「ありがとう。私も君達から教えて貰ったこと、無駄にはせん。では、また会おう。」車を出す

「ウイル、この車マニュアル車なんですね。」

「マツダ RX-7 FB3S後期型、シルバーモデル。5速MTだ。手に入れるのは容易かったがメンテナンス等に金を取られた。合計1500万円は費やしたな。」

「そんなにかけたんですか？でもウイルって他に車ありましたよね？」

「アヴェンタドール LP-700-4のことか？あれは2人乗りだ。10年前の時はお前達が小さかったからシートに2人乗れたが、

今はそうもいかんだろう。これは3人以上で移動する時用だ。」4速に入れる

「それよりも、ウィル、どこで夕食を摂るつもりですか?」

「帝国ホテルのレストラン『レ・セゾン』。ドレスコードが必要だ。だからお前達にはスーツで来るようお願いしたのだ。」

「帝国ホテルってそこって高いですよねウィル?」

「そうだなユウ。お一人様21000円だ。サービスを更に付けるならもつと高くなる。泊まる以上もつと高くなる。」

「いくらなんでも高過ぎませんか?僕達の財布10000円も入ってませんか?」

「いつ私はお前達に払えと言った?私の奢りだよ。チハヤはAランク昇格、ユウは私同様外で働き初めて3周年になるお祝いだ。それに私は10年もの間お前達の成長を直接見守ることができなかった。見ている間に随分遅くなった。」第二の親”として、”親友”として祝ってやるのが筋だろう。」

「ありがとうございます。ゴチになりますウィル。」

「素直でよろしい。ついでに言えばあのレストランの個室を頼んだ。防音は完璧だ。そこで一っだけお前達に相談がある。ベス、イマニシに続けたった4人の”まだ生きている”私の親友であるお前達にしかできん相談だ。聞いてくれるか?」

「勿論聞きますよウィル。最も、僕と姉ちゃん合わせてもウィルの約半分しか生きてませんからお役に立てるかわかりませんが。」

「構わん。元より解決できると思っていない。お前達に聞いて貰うだけでも胸中にただ燻らせるよりは遥かにマシというものだ。」

「お前達も知ってるの通り私は23年前Navy SEALsで働いていた。その時の直属の部下でありまた私の手足となって動いてくれた初代”相棒”であるアンゲラ”・ビグルス”・マーフィー大尉という奴がいてな。ちようどあの日は敵スナイパー排除の為に私も珍しく前線に出ていたのだ。」

1992年 12月 イラク ファルージャ

「相棒、今回こそ殺るぞ。」

「うん。任せてよ。」

「奴のブツはドラグノフ狙撃銃。だが君はM40A3だ。狙撃の腕も恐らく君が上。殺ったら下の車でさっさと引き上げる。簡単な仕事だな。」

「ねえ相棒。」銃を構える

「どうした?」

「指輪買ったんだ。私のとあんたの分。帰ったら返事くれる?」

「勿論だ。」

「もう従軍牧師さんと皆には話をつけてあるんだ。簡易的だけど式を挙げてくれるって。」

「私が見てない間に何してたんだあいつら。」

「あんたが事務仕事してる間にチーム3総出でやったから、あんたに

気付かれない内にすぐ出来上がったよ。」スコープを覗く

「中佐にどやされないと良いが。」

「中佐はリスが説得したから大丈夫。それにあんたはこの1年男でありながら砂埃舞うこの中東で文句一つ言わず頑張つて来たんだから、少し位休みなつて。働きすぎだよ。」

「そうかもしれないな。ここ1年本国に帰つてないからな。」

「今回の任務が終わったら二人で1年位休暇を取ろう。私の故郷テキサスでのんびり暮らすんだ。相棒。」

「なんだ、ビッグルス？」

「子供は沢山欲しい。最低でも3人。」

「おいおいおい、それこそ事実上の求婚じゃないか。体力が持つ限り協力してやるよ。むしろ君の体力が心配でならないのだが。」

「大丈夫。マーフィー家の人間はベッドの上でも強者だからさ。ふっ、あんたのその返しも事実上のOKサインじゃん。」

「今更気の利いた返事を考える仲でもないだろう私達は。」

「そうだね。小さい時からずっと一緒に、ベスと3人で81年に一緒にアナポリスに入って、一緒に飛んで、ベスは水上艦に行っちゃったけど、私達2人はNavy SEALsに入って18年。ずっと一緒だったね。」セーフティを外す

「これからも一緒だ。ずっとな。」ストーナー63を下ろす

「うん。見つけた。距離1128ヤード(約1.031キロ)。風速は？」

「ほぼ無風。」風速計を確認する

「殺る。」

「一撃で決めろ。音でこの辺をうろうろしてるテロリストが集まってくる。」

「小さな的を狙え。」ダアン

「仕留めた。」リロード

「よし引き上げるぞ！全員撤収！」

「少佐、敵が殺ったそばから湧いて来やがる！CAS（近接航空支援）を！」ダダダダダッ

「こんな砂嵐の中やれる訳が無い！何とかして逃げるぞ！203（グレネードランチャー）を使い！中佐から失敬したのがある！」グレネード弾を渡す

「少佐、グスタフ（無反動砲）も使ってよ！」

「待ってる・全員退避！Fire！」バアン

「Go Go Go ヴッ！」被弾

「相棒！」駆け寄る！！

「駄目だ！右太股をやられた。私を置いていけ相棒！君まで巻き込めん！」

「その程度なら砂刷り込んで水飲めば治るよ！諦めないで！リス！手を貸して！」肩を貸す

「わかった！」

「大尉後ろ！」

「ガッ。」首筋に被弾する

「大尉?! このクソ野郎！」ダダダダダッ

「相棒！ミイラ取りがミイラになってどうする?!」ガ―ゼをあてる

「脈が切られた・もう駄目・相棒、チームを連れて逃げて。」

「今更そんなことはできん！諦めるな！」止血を試みる

「私の部屋・一番上の・引き出しに指輪・が入ってる・相棒、これからは・それを・私だと思って。」

「ビグルスは死後二階級特進で中佐となり、敵凄腕スナイパーの排除や過去の武勲、私を守った功績により合衆国軍人が受けられる最高の榮譽、名譽勲章を追贈された。その上来年最初に就役する我が海軍の駆逐艦にその名を冠する榮譽も重ね与えられた。」

「ビグルスは私の初代”相棒”でありまた歴代の相棒の中で最も長い付き合いだった。テキサスで出会い以後18年ずっと一緒だった。」

お前達には申し訳ないがベスやイマニシ、他の相棒たち、そしてお前達に比べても正直ぶつちぎりで私はいつのことを強く愛していた。あいつは確かに強かった。だが、他の者には無い今にも消えてしまいそうな儂い笑顔に私は惹かれたのだ。あの笑顔を見ることはもう叶わない。アイツを失い23年が経った。そして私はここにいます。」

イマニシと呼ばれ346プロダクションで働き始め、最初にあてがわれた同僚の一人があるうことかビグルスにそっくりだった。一緒に暮らし始めて一週間も経っていないが、彼女と交流してよくわかった。まさに彼女はビグルスの生き写しだ。姿も声も性格もあの儂い笑顔も全て。意識していないとつい土下座して赦しを乞いそうになる。かつてアイツにしていたように後ろから抱き締めてしまいたいそうになる。彼女はアイツじゃない。しかしそれでもやはりアイツの面影が脳裏に浮かぶ。だが彼女は今の私の”家族”だ。避けたりなどできない。私は自分が家庭に入る資格が無い人間だと弁えているし、ビグルスへの贖罪の為にも独身を貫いてきた。だが彼女を見てその決意も崩壊寸前だ。決意が揺らぐ私自身への軟弱さにも腹が立つ！だが、今更どうしろと言うのだ。神は何故私にこのような試練を課すのか。」

「ウイル。」

「すまん。酒が入って舌が滑らかになったようだ。誰かにここまでぶちまけたのも実に15年ぶりだ。お前達に聞かせることではなかったな。」

「ウイル、マーフィー中佐は別にウイルに贖罪なんて求めてないと思

います。ウイルが幸せに生きてくれさえすれば。」

「そうかもしれないや、アイツなら間違はなく言うだろうなチハヤ。だが私は軍人だ。そしていつも前線で陣頭に立って戦っていた。

太平洋艦隊司令官になるまで現場が仕事先の時は陸へおかへにいる時間より艦にいた時間の方がいた時間の方が長かった。戦死する可能性が高い中で家庭になど入れんよ。

迷惑を掛けたくなかったのだ。私の公式Facebookには『飛ぶのが楽しすぎて独身のまま大将になった男』と書いてごまかしているが、本当はビグルスへの贖罪、周囲に迷惑をかけることへの恐怖、また親友を失う恐怖に駆られていたからずっと一人で生きてきたのだ。

現にF/A-18が我が海軍に配備されて以降私は単座型にしか乗らなかつた。だが正直ずつと寂しかった。ずっと一人だった。だが、今更どの面下げてベスの奴に甘えられようか。今更チハヤ、ユウ、お前達に甘えるなど論外も甚だしい。そんなことができよう筈がないではないか。」

「ウイル、僕達がそんなに頼りないですか？」

「そんなことはない！だが。」

「でしたら素直に僕達に頼って下さい。僕達はもう大人です。それに僕達は”家族”であり”親友”です。助け合わないと。ずっと一方的にウイルに助けられるのも嫌ですから。でしよ、姉ちゃん？」

「そうね。ウイル、私達を頼って下さい。貴方は一人じゃないんですよ！ローレン大統領も、346の今西部長さんも、私達も、同僚さんもいるんですから！」胸を張る

「10年前はあんなに泣き虫で小さかつたお前達がたつた10年でここまで大きくなって私に説教するのか。私も年をとつた。ありがとう友よ。これからはもつと素直に生きることにする。それで良いよな。ビグルス。」指輪をさする

「ウイル、飲み過ぎです。」レツシヤーを支える

「すまん。調子に乗ってワイルドターキーなどに手を出したのが愚かだった。うゝ気持ち悪い。だがこんなに楽しい酒は実に24年ぶりだった。反省はするが後悔はない。というか早速お前達に頼ってしまっているな。」

「そうですね。これから頼って下さいよ、ウイル。」

「ああ。この部屋だ。」鍵を開ける

「すまんが先に寝る。もう限界だ。」Zzzzzz

「ウイル？もう寝ちやった。早すぎるって。」呆れ

「優、私達もシャワーを浴びたら寝ましょ。明日もお仕事だから。」
「うん。」

シンデレラプロジェクトの組織もだいぶ様になってきた。彼女達

もどんどん進歩しているし私も今回のチハヤ達につけて貰ったレッスンで重要なことに気付くことができた。だが纏め役がない。

他ならぬ私がシンデレラプロジェクトの纏め役だが、私が不在あるいは身体に何かあった際に代わりに指揮を執れる副司令官が欲しい。新田さんにしようか迷ったがやめざるを得ない。彼女はしっかり者だがまだ未成年の大学生だ。成人している者で適当な人材を寄越して貰えないかイマニシに聞いてみよう。

海軍大将、初仕事（何故かY o u T O b e）に就く

レツシャー大将のウワサ⑩

現在の中央情報局（C I A：アメリカのスパイ機関）軍事担当上席長官補であるキルライン中将とは世話を焼く先輩と世話を焼かれるおっちょこちよいな後輩の関係だったらしい。

346プロダクション ウィリアムの執務室

コンコンコン ノック

「入れ。」

「失礼するよウィリアム。」

「イマニシ。」

「ちよつと相談なんだけどね。」

「仕事か？」

「ああ。明後日の我が346でやっている公式Y o u T u O eライブ配信の仕事で本来なら川島君、速水君、高垣君にお願いする予定だったんだけど、高垣君がアルコール中毒（笑）でしばらく無理になっちゃったんだ。今回の企画のテーマは『酒の肴』で、ある程度以上の年齢か貫禄がある人にやって貰わないといけない。だけど明後日はその条件に合致するアイドル達は皆出払ってしまつててね。」

「御託は良い。『代わりに出る』とはつきり言え。」

「助かる。詳細はこれと呼んで確認してくれ。」

「アイドルにしておいて初仕事がライブのラの字も無い動画配信なのだ。代償が必要だな。そうは思わんか、イマニシ?。」

「私に払える代償なら喜んで払うとも。」

「私に万が一のことがあった場合代わりに指揮を執ることが出来る副司令官が欲しい。当然大人だ。成人しているアイドルをシンデレラプロジェクトによこせ。ある程度プロデューサーもできそうな奴だ。人選はお前に任せる。」

「わかった。再来週までに手配しよう。」

「それと渋谷凛をシンデレラプロジェクトのアシスタントプロデューサーに任じろ。私の副官にする。苦勞をかける以上給料に色を付けてやりたい。」

「わかった。それもやっておく。ウイリアム。」

「なんだ？」

「渋谷君に入れ込むのは結構だが忘れないでくれよ。彼女はビグルスではない。」

「わかっている。アイツの面影を求めて彼女を求めたりはせん。それに私と彼女は30も離れている。彼女が私をそんな目で見たりしないだろう。それに私は傍にいてくれるだけで満足している。」

「さて、君はそうだろうか渋谷君はどうか。もう少して会議の時間だ。じゃあウイリアム、頼むよ。ついでに埼玉の初ライブの告知も抜かりなくね。」退室する

「皆さんこんばんわ。今週も『346クッキング教室』の時間がやって参りました。司会の川島瑞樹です。」

「速水奏です。」

「ウィリアム・レッシャー・イチノセ J.r. です。高垣さんの代理として出させていただきます。よろしくお願いします。」

「お久しぶりですレッシャー提督。」

「久しぶりです。9年振りですね。川島さん、あの時は青い花の髪留めを付けていましたが、今は紫の花なんですね。」

「あら、これ似合ってますんか?」

「いえ。むしろ良く似合ってますよ。あの時川島さんはまだ19歳のピチピチでしたからね。あの時より腰が落ち着いている今なら青より紫ですよ。」

「あらやだ、今もまだピチピチですよ!」

「川島さんはまだギリギリですがピチピチを名乗れて正直羨ましいですな。私は川島さんのインタビュを受けたのが35歳の時。当然今は44歳です。新人な上にアイドル界で言えば老人ですからね。」

「その割にまだ肌は志希とあまり変わらないように見えますけど?」

「速水さん、一ノ瀬家の人間は何故か外見だけは老けません。それは志希も私も同様ですよ。一ノ瀬家からは頭も身体も常識はずれな奴ばかり生まれてしまう。アイツに振り回されている当事者なら身を持ってお分かりの筈だ。」

「ですけど、常識はずれがアメリカ海軍大将にまで昇れるものなのですか?」

「私は4歳でパイロットを志し、本来であればアナポリス海軍兵学校には17歳からしか入れないにもかかわらず、10歳で入り14歳で卒業した変人もいいところな男です。」

「では、そんな変人であるレッシャー提督がオフの日にお酒の供にし

ているものを早速、披露して頂きましょう！」キッチンを映す

「こんな粗野な男の粗野な料理ではあるが参考になれば幸いです。」腕をまくる

「材料は鶏胸肉3枚卵2個と生姜にんにく、そして白ワイン。片栗粉と小麦粉、小麦粉は正直どのタイプでも大して変わりません。そして重要なのがこのあごだし。他のあごだしではいけません。久原のあごだしを使って下さい。材料からなんとなく察した人もいるかもしれませんが今回のおつまみはシンプルに鶏の唐揚げです。」

「唐揚げですか。」

「太っちゃうわねえ。」

「太らないように調理法を工夫します。これによりアイドルも食べられますし、おつまみはもとより夕食でもなんでしたら朝食昼食でも使えるかなり使い勝手の良い唐揚げができますので是非とも参考にしてみてくださいです。」

「まずは鶏胸肉の皮を剥がして一口大に切ります。久原のあごだし300ml、すりおろしたニンニク3片と生姜30gをすりおろしたものの、白ワイン適量を混ぜたタレに5分程漬けます。酒はこの際リキュール以外なら基本どれでも大丈夫です。」

「リキュールではだめなんですか？」

「以前桃のリキュールを実験で入れてみたことがあります。味は大丈夫でしたが桃の香りがする奇妙な唐揚げになってしまいました。その上大量に作ってしまったのでそれを一人で平らげるといふ苦行をさせられました。皆さんも私のようなミスはしないで下さい。」苦笑

「レツシャー提督は唐揚げのお供にはどのお酒を勧めますか？」

「シンプルにSUPER DRYでスカツとするという手もあります

が、私が勧めるのはコアントローです。ロックでも良いが、私はよくレモン、サイダーで割ったものを愛飲しています。それとどうでも良いことですがコアントローは少佐時代から23年連れ添った相棒です。これは良い酒だ。川島さんは飲んだことがおありで？」コアントローを出す

「いいえ。」

「ではお試しあれ。」コアントローとレモンとサイダーを置く

「では川島さんがコアントローを楽しんでいる内に揚げてしまいましよう。大抵の方は唐揚げを二度揚げすると思います。ですが私は四度揚げします。」

「四度揚げ!?!」

「パサパサになりませんか?」

「大丈夫です。一分半揚げて一分冷やす作業を4回繰り返すことでパサパサになるのを防ぎつつ中まで火を通します。まずはタレを捨て、卵を投入し鶏胸肉に馴染ませます。そして小麦粉と片栗粉を1:1で混ぜた粉をつけて揚げます。」油に投入する

「では今の内に宣伝させていただきます。私が統括します『シンデレラプロジェクト』のアイドル達が来月埼玉県さいたま新都心クーンシティで初ライブします。最後ながら私も出演しますのでお時間のある方は是非いらして下さい。入場料は取りません。ですが気に入った者がいたらそのアイドルのグッズや特典付きCDを買っていただきたい。私のアルバム『Tranquility』も発売予定です。ですのでどうぞよろしく願います。」

「できました。召し上がって下さい。」

「いただきますー!」

「鶏胸肉なのにちゃんとしつとりしてますね。美味しいです提督!」

「ありがとうございます。通常の醤油だと味が強烈になる場合があります。ですがあごだしを使うことでまろやかにあります。強い主張が無いので誰でも食べられますから、酒の供としてのみならず客人をもてなす際もよく作っています。是非作ってみて下さい。」

「いやあ助かった。ありがとうウイリアム。」

「この程度、造作もない。それより報酬は用意したのか?」

「川島君を持って充てる。副司令官として使うと良い。」

「感謝する。」

「それと君の傭兵小日向君と五十嵐君をスカウトの形で書類上シンデレラプロジェクトに置いておいた。頑張ってくれ。それと、一人シンデレラプロジェクトに参入したいと申し込んで来た子がいる。」

「ここに呼べ。」

「もう扉の外で待機してくれている。入ってくれたまえ。」

「失礼します。」ガチャ

「・おい、イマニシ。」今西部長を睨む

「彼女は乙倉悠貴君。君を見てピンと来たらしい。どうだい?受け入

れるかね?」

「私は来る者は拒まない。だが念のため今まで同様キルラインに裏を取って貰うが、文句は無いな?」

「無論だとも。じゃあ後はよろしく頼むよ。失礼」退室する

「あの野郎後で覚えてろ。」不機嫌になる

「あ。あの。」

「乙倉さんだったな。こちらに座りたまえ。」かなり不機嫌

「あの、プロデューサーさん。私、何かまずいことしちやっただでしょうか?」

「別に君は何も悪くない。イマニシを後で締め上げれば済む話だからな。それより乙倉悠貴さん、何故私のところへ?他にも選択肢はあったと思うのだが。」

「さつき今西部長さんが仰った通りです。先週プロデューサーさんをお見かけした時に、胸に詰まっていた何かが取れた気がしたんです。この人と働きたいなって思ったんです。何でもしますから、どうか私をプロデュースしていただけませんでしょうか?!」頭を下げる

「何でも。わかった。では一っだけ私の要望を聞いて欲しい。」

「はい。何でしょうか?」

「仕事等のどうしようもない場合を除いて、私の傍から離れるな。隣にいてくれ。」

5代目相棒はビグルスそっくりだし、乙倉さんは2代目相棒だったグースそっくりときた。イマニシの悪意を感じるな。あの野郎一体何を考えてやがる。」

海軍大将、デビューする

渋谷凧のウワサ②

戦闘機等をリアルな操作で飛ばせるシミュレーションゲーム『DC S (Digital Combat Simulator) World』をやり込んでいた。F-15C、F-16C、F/A-18C、F-14Bの4戦闘機なら飛ばせるのでレツシャー大将とシミュレータで一緒に飛ぶことができるらしい。

レツシャー大将のウワサ⑬

裏切者<敵<他人<仲間<家族∥五十嵐響子・小日向美穂 恩人∥現在の直属の部下<親友
∥相棒∥戦友 らしい

塩見周子のウワサ①

まだ実家から追い出されていない11歳の頃、観光に来たは良いが宿が無くて困っていたアメリカ人を自分の部屋に泊めてあげたらしい。

私が軍人を志したのは、3歳の頃だったと思います。

ノーフォーク海軍基地、そこで曲芸飛行を披露していたブルーエンジェルのファントムの勇姿を見て、『飛んでみたい』と思ったからです。

そして学校への入学方法を調べていく内に男性のパイロットが歴史上まだいないと知り、どうせやるならとより過酷な戦闘機パイロットの道を選んだ。

正直、不安ではあったが、初任地の31飛行隊では母親のような上官・部下が皆で、「レッツシャーを育ててやろう」と、厳しくも優しく育てて下さった。

こんなにも強い、温かい人間関係がある職場は決して他には無いと、実感しました。

あの経験は、私が長年に亘りパイロットを続け、『提督』と呼ばれ敬意を払って貰えるところまで来れた原点です。

ぜひ、若い人には一人でも多く、海軍を志して欲しいと願っています。

ワイリアム・レッツシャー・イチノセ ジュニア

少将時代 川島瑞樹アナから何故軍人になったのか質問された時の回答

埼玉県 コクーンシティ

「さて、とうとう我々の初ライブだ。自分を見失わず、いつものようにやってくれ。」

「はいー！」

「行くぞシンデレラプロジェクト！」

「おー!!」

皆特に過度に緊張することもなく上手くやれているようだな。大変結構だ。

「相棒？」^{バディ} レッシヤアの袖を掴む

「ああ、大丈夫だ相棒。^{バディ} ほぼ連続になるが、大丈夫か？」

「大丈夫だよ。あんたの歴代相棒の人達に負けないように体力はつけたからさ。」

「ならば結構。私達はTOP GUNだ。全力を尽くすのみ。行くぞ

！

「うん！」

「私は30年間戦い続けてきた。そして結果を出し続けてきた。軍隊というのは、努力すればほぼ報われるしそれ相応の報酬も与えられる。確かに死ぬ危険はある。だが、アイドルは努力して必ずしも結果がついてくるものではない。むしろ輝くことができるのはほんの一握り。そういう意味では私は果報者だっただろう。だが、これからはその保障はない。全ては私の努力次第そして私の家族である君たち次第だ。労働は何にせよ尊いものであるし、努力も当然その通りだ。やっておいて損はない。私たちはそれをよく知っている。これからもその努力を少しずつで良いから積み上げていこう。そして今日の

ライブの成功に寄与してくれた皆に対し尊敬と感謝の念を捧げたい。ありがとう！今日は私の奢りだ。では、乾杯。」

「「お疲れ様でした！乾杯!!」」

「提督。」

「瑞樹さん。手間をかけさせて申し訳ない。」

「いいえ。こんなことでしたらいくらでもお任せ下さい。居酒屋ならいくらでも宛てがありますから。」

「流石です。イマニシが346屈指の飲兵衛と評しただけありますね。」

「私なんてまだまだです。強いと言う意味では楓ちゃんと亜季さんが一番ですから。」

「なるほど。」カルーアミルクを呷る

「相棒、瑞樹さんの相手ばかりしてないで私の相手もしてよ。」すり寄ってくる

「ああ。私の股座に座れ。」

「良いの?」

「当然だ。むしろ私がそうして欲しい、相棒。」手招きする

「こういう日常的ふれあいでは信頼関係を構築するのがパイロット業を上手くやっていくコツだ。それは業界が違えども、ある程度は通用する筈だ。」

「ちよつと汗臭いけど我慢してね。」レッシヤアの股座に座る

「プロデューサーさん、私も!」

「グース・なら隣に座れ。」

結局乙倉さんをグースと呼ぶことにした。当初は名前で呼んでみたが違和感しかなかったので2代目相棒のTACネームにあやかり”グース”と呼ぶことにした。我ながら本当に度し難いな。呆れる程未練たらたらだ。死んだらビグルスとグースに土下座して詫びな

ければならないだろう。

「キョウゴ、相棒とグースにお茶漬けを。」

「はい。」

「瑞樹さんとはかくグースが思ったより早く皆と打ち解けられて良かった。」

「いや、あんな練習させたら皆そうなるよプロデューサーさん。」

「そうにや！Pちゃん鬼畜過ぎてヤバかったにや！」

「いや、正直やりすぎた。申し訳ない。だが君達の”家族”としてのチームワークが強化されたし、想像以上に君達がタフだったことを知ることができた。」

「私達の絆は強くなっただけどあれはやりすぎだよ。いきなり浜辺に集められて基礎水中爆破訓練の第一段階をやるって言われた身にもなつてよ。あれSEALsの選抜訓練でしょ？」

「そうだ。我が海軍特殊部隊SEALsの選抜訓練だ。次の合宿はお待ちかね地獄週間だ。2週間で絆はもとより根性も鍛え直す。」

「地獄週間!？」青ざめる

「李衣菜ちゃん地獄週間って何にや？」

「みくちゃん・5日間不眠不休で練習できる？」

「無理無理！何言ってるにや！」

「ヒンズースクワット700、腕立て伏せ500やってから5〜7人でチームを組んでボートに乗り沖合にあるブイまで競争して貰う。ペナルティは特に課さないし1日3時間の睡眠時間も保障する。本来の地獄週間よりかは遥かに簡単だ。私が先頭に立つからついてくれば良い。」

「相棒、流石にそれはキツいって。やるにしてもご褒美が必要だよ。」

「わかった。地獄週間を最後まで私について来れた者には私ができることなら何でもしてやろう。」

「!!」

「プロデューサーさん、今何でもって言ったね？撤回しないでね。」

「当然だ。海軍大将に二言は無い。」

彼女達は私の”家族”だ。多少のことは聞いてやりたいし、例えやらかして（意味深）も文句を言うつもりはない。

「君達が望むならベッドの上で戦って（意味深）やろう。尤も、こんな身体中傷だらけの年寄りで良いならの話だな。」

若い頃イマニシとベスにもう少し貞操を大事にしろと注意されたが、まあ今更だろう。私とて誰彼構わず相手している訳ではない。私の人生に飛ぶ以外の喜びを与えてくれる”家族”以上の者としかやってないのだからな。

「相棒はもうちよつと自分を大事にしなよ。」

「君達”家族”だからこう言うのだ。我が友よ、君になら尚のことさうだ。レッスンに加えイマニシの手伝いに忙殺されて帰ってくる私を自分自身も疲れてる中いつもそれとなく気遣ってくれる。年寄りにとってそれがどれほど嬉しいか。だが私は君に世話になりっぱなしで恩返しができていないからな。君が望むなら何でもするし何でも与える。私は今まで34年もの間歴代相棒の献身に報いてやれなかつた。せめて5代目には報いてやりたい。」

これは私の我が儘でもある。わかってくれ相棒。

「いずれにせよ地獄週間ヘル・ウィークを越えられたらの話だ。地獄週間は欲望だけでは越えられない。皆の根性と絆に期待している。」

流石に宴会はお開きになり皆寝静まった。私はバルコニーでグース（2代目相棒の方）の愛酒だったジャックダニエル（ゴールド）を一杯、手に持って空を見上げていた。最初はあまり好きではなかった。まあ今もあまり好きではないが。だが、呑むと不思議とよく眠れる。養命酒代わりだ。

「ビグルス、グース、マーリン、ランスロット、父さん、母さん。精一杯生きて土産話を持って逝く。もう少し待っていてくれ。」

私は23年ぶりに仕事も心も充実している。こんな嬉しいことはない。

「提督。」

「ミホか。どうした？」

「一緒に寝て欲しくて。」

「寂しがりだな相変わらず。まあ良い。私のベッドは相棒とグースが寝てるから私の上で寝ろ。」

「ですが。」

「相変わらずお前は軽すぎるのだ。乗られたところで息苦しくはならん。」

チハヤもそうだが私の“家族”以上の者で年少組の者の過半数は軽すぎるのだ。もう少し太らせるか。

「さあそろそろ寝るぞミホ。」手を繋ぐ

「はい。」

ヘル・ウイック
地獄週間の次はアイドル（本業）の次、オフアーを請けていこう。皆と相談しながらな。PS4も買ったから相棒とエースコンバットの配信も考えてみよう。

海軍大将、疫病神を拾う

2016年1月14日 1844 南池袋公園 某ベンチ

「ふう。」

たまにはこんな風に落ち着いて一人で缶コーヒーを飲んで落ち着くのも悪くない。新しい仕事を始めてからずっと騒がしかったからな。たまには自分を見つめ直す機会が必要だ。それはそうと

「何をしているのだあの小娘は。」

世界に絶望していると言わんばかりの表情で空を見上げる13歳4歳位の黒い服を着た娘。発展途上国ならいざ知らず、日本の娘がして良い表情ではないぞ！

「泣いている」

近付いてみるとこの娘、泣いているではないか。ますます放つてはおけん。

「おい、小娘。」隣に座る

「？」

「何故泣いている。何に絶望している？」

「お仕事先が倒産してお家からも追い出されちゃったんです。このまま死ぬしかありません。」

「お仕事？その歳で働いているのか？」

「駆け出しでしたが、アイドルをやらせて貰っていたんです。でも

「。」

「？」

「プロダクションが倒産しちゃったんです。前も。その前も。」

「。」

なるほど。疫病神ってやつか。だがな。

「学校が燃えちゃったり、両親の仲が悪くなっちゃたり、同僚の方が有り得ないアクシデントに見舞われたり。私のせいで沢山の方が不幸になっちゃいました。アイドルになりました。良かったのに。幸せになりました。良かったのに。」

「。」

いつの間にか娘は泣き止み、そして自嘲するような笑みを浮かべていた。

「私なんかアイドルになつては駄目だったんでしょね。私なんか、生まれてこなければ。」小袋を取り出す

娘は小袋から白い粉末を取り出した。ニンニク臭。この娘、まさか！

「！」手を掴む

「止めないで下さい！私のせいでこれ以上誰かを不幸にしたくないんです！」粉を飲もうとする

「!？」

「なんて馬鹿力！だから狂気に飲まれた者は嫌なんだ！」

「許せ、娘。」鳩尾を殴る

「かはっ」気絶する

やってしまった。まあお節介はいつものことだ。とりあえず相棒に連絡だ。

「相棒、今南池袋公園にいる。何人か暇なのを連れてきてくれないか。詳細は追って知らせる。」

池袋 レッシャーの別荘 リビング

「？」目覚める

「目が覚めたか、娘。」

「はい。」

「一ついいことを教えてやろう。君が飲もうとしていた粉、ヒ素だろ。うが言っておくがヒ素では楽には死ねないぞ。溺死するのと何ら変わらない死に方を迎える。もがき苦しんで無様に死んでいく。」

「!?」

「そんなに楽に死にたいなら。」「ワルサーP38（シルバーメタリツク）を向ける

「!?」

「言っておくが本物だ。それにこのビルは私の別荘、そして防音処理も為されている。だが弾代もタダではない。1発26円。君の頭に撃ち込めば当然血が飛ぶ。部屋のクリーニング代と死体処理代合わせて100万でやってやろう。君にそれを払えるかな?」

「。」「俯く

「もし払えないのなら、私が依頼する仕事をやって貰う。それで出る給料から代金をくれればいつでも眉間に9ミリパラベラム弾を撃ち込んでやる。」

「あなたは殺し屋さんなのですか?」

「いいや、私はウィリアム・レッシャー。元軍人だ。諸事情あつて日本でも合法的に銃を携行できるようになっている。私が名乗つたのだ。君の名前を教えて貰いたいものだ。」

「すみません、私は白菊ほたると言います。」

「で、どうなのだ?ほたるさん。100万円払えるのか?」

「すいませんが私にそんな大金はありません。口座にだって10万円入ってるかどうか。お財布にも3000円しか入ってません。」

「アイドルをやっていたと言っていたな。ならそれで稼ぐが良い。私は元々合衆国海軍で働いていたが、今は346プロダクションのプロデューサーだ。後1人位なら私の指揮下に迎えられるだろう。最悪イマニシを締め上げて引き入れる!」

「どうして疫病神の私にそこまで。」

「22年前、まだ若かった頃の私にそっくりだったからだ。私をかばって相棒が死にそして小隊も一つ私のせいで壊滅的被害を被った。

現役の時、歴代4人の相棒全てを失い私は 死神扱いだった。

他人に迷惑をかけている質も量ももはや私は君ごとき小娘など比較にならない。今まで何千人と殺してきたのだ。

そんなろくなことがなかった私の人生だが、それでも希望を持って生きている。まだ20年も生きていない君が人生を終えるのはまだ早いとは思わんか？

しばらく私とともに働いてみると良い。それでなお絶望が拭いきれなかったのなら、苦しませずに殺してやる。

疫病神がなんだと言うのだ？なら私は死神だ。何千人もの死に係し、そいつらの怨みと遺族からの恨みを一身に背負っているが、私はまだ生きている。

それに合衆国では破産した者にチャンスを与える。そういう者は破産の屈辱を知っている。もう二度と受けたくないと思掻くのだ。日本と違ってな。

私はクオーターの日本人だが、アメリカ人の価値観が強い。チャンスを与える、未来ある若者に。君にチャンスを与えてやろう。後はチャンスを掴んだ者の、能力次第だ。」ワルサーP38を下ろす

「私に、チャンスをくれるんですか？もう一度アイドルになるチャンス。」

「そう言っている。後は私の手を取るだけだ。どうする？」手を出す

「こんな疫病神ですが、よろしくお願いします。」握手

「疫病神系アイドル、白菊ほたるだ。新しい”家族”として世話してやってくれ。」

「白菊ほたるです。よろしくお願いします！」

II The Star-Spangled Banner

海軍大将、決意する。そして元帥になる。

「海軍特殊作戦徽章を制服から外す」

「SEALsから抜けるのか？レッシャー少佐。」

「マーフィー大尉の件もありました。私の居場所はやはり空であり、空に還るべきなのです。大佐、今までお世話になりました。」敬礼

「わかった。引き留めはしない。むしろ男でありながらよく1年、訓練期間を入れれば3年半、文句一つ言わず任務を遂行してくれた。感謝する。」答礼

「退室しようとする」

「ああ、これは持つていけ。君は我らの”家族”だ。こいつを持ち続ける資格がある。」海軍特殊作戦徽章をレッシャーに付け直す

「達者でな、レッシャー少佐。君の武運を祈っている。」

「ありがとうございます。では失礼します。」退室する

メタリックブルー（専用塗装）のF-14 ・ F/A-18戦闘機に乗って戦い、敵を墜とし続けたことから敵味方どちらからも”蒼い彗星”の異名を奉られていたらしい。

小早川紗枝のウワサ①

小さい頃酔い潰れたアメリカ人を救ったことがあるらしい。

2016年2月28日 アメリカ合衆国 メイン州 バス鉄工所
「24 years ago. During my tour of duty in Iraq, I faced the greatest crisis of my 30-year military career. I was shot in the right thigh by a terrorist and rendered incapacitated. I ordered her and her men to leave me and run. I didn't want to slow them down. But they followed. I carried me. And she died. I got in. Even though we were going to have a wedding the next day. She killed 147 terrorists in front of my men, six snipers, and I protected her colleagues and the Marines. She had a medal. Some of the words of the Medal of Honor. And now she is a

destroyer, protecting a carrier
strike group and her shipmate
s. May God bless Captain Schul
tz and the rest of the 380 mem
ber crew, my comrades—in arms!
I hereby declare the launch of
the Arleigh Burke class destr
oyer No. 62, the 『Angela Murphy』
!

日訳： 今から24年前。

イラクでの任務中、私は30年の軍歴の中で最大の危機を迎えまし
た。

テロリストに右太股を撃ち抜かれ行動不能にされたのです。

私は彼女と部下達に私を置いて逃げるよう命じました。足手ま
いは嫌だったからです。

ですが皆はSEALsの教えを守り、私を担ぎました。

そして彼女は私を庇い戦死したのです。次の日には結婚式を控え
ていたにもかかわらず。

彼女はテロリストの歩兵を147人、狙撃手を6人殺し、同僚と海
兵隊員を守り続けたのです。名誉勲章を受けるに値する成果をあげ
続けたのです。

そして今度は駆逐艦となり空母打撃群と僚艦を守ります。

シウルツ艦長以下、380名の乗組員諸君に、我が戦友と神の御加
護があらんことを！

ここにアーレイ・バーク級駆逐艦62番艦、『アンゲラ・マー
フィー』の進水を宣言する！

「相棒、^{パデイ}グース。わざわざついてきてくれて感謝する。つまらない式

典だっただろう。」

「大丈夫だよ相棒^{パディ}。軍艦の進水式を一回生で見ても良かったからさ。それに私は相棒の副官なんだよ？ついてかないと駄目じゃん。」

「私もお仕事がありませんでしたしプロデューサーさんの傍にいないと駄目ですからついてきました。」

「ありがとう。明後日はホワイトハウスで私の元帥号授与式だ。以前お願いした通り二人には我が合衆国国歌を歌って貰う。我が合衆国の重鎮達が勢揃いだが緊張し過ぎないように。」

「そう言えば授与式って誰が出席するんですか？」

「大統領、副大統領、国防長官、海軍長官、上院議長、下院議長、統合参謀本部議長、海軍作戦部長、海軍作戦副部長、海軍原子力推進プログラム部長、戦略軍司令官、艦隊総軍副司令官。まだまだいるが主たる面子はこんなところだな。それと相棒、グース。」

「?」

「元帥には生涯にわたりオフィスと俸給と副官が与えられる。本来なら現役の大佐ないし中佐の副官が派遣されてくる予定だったが私の方でごねておいた。相棒に特例且つ名譽的措置として我が海軍の大佐の地位と私の副官任務を公式にペンタゴン^{アメリカ国防総省}から託される。グースにも次席副官という形で中佐の地位が与えられる。シンデレラプロジェクトのメンバー達にも似たような処置がペンタゴンから委託されることになるだろう。特に君達2人は私がかからむ合衆国の行事に強制的に連行することになるがよろしく頼む。」

「大丈夫なのそんな措置取って？私も悠貴も誰もアナポリス出てないし何だったらアメリカ人ですらないの？」

「大丈夫だ。当然大統領も当初は渋ったが、私もアイツのことはよくわかってる。結局は折れてくれた。」

「それもそうだ。2人はビグルスとグース(2代目の方)そっくりだしベスも死んだ2人をよく知っていた。写真を見せた途端に折れたのも無理からぬことだろう。」

「明日はフリーだ。明後日が忙しくなる分十分に休み英気を養うように。」

「相棒は？」

「私は独自に行動する。明日だけは一人にしてくれ。」

アーリントンに行かねばならない。相棒達に会う為に。アイツらもたまには顔出さないと拗ねるだろうからな。

2016年2月29日 アーリントン国立墓地

ちょうどこんな日だった。ビグルスを葬った日も、こんな雨が嵐のように降り続いていた。

「I'm going to miss you all. I think I didn't make the wrong choice to the point where other would abuse me for my choice. But I mourned you as a result. Biggles, Goose, and the other Japanese girls who look just like you, I'm trying to hold on to. Please don't despise me. I've reached my limit.

(皆がいなくて寂しいよ。)

私は、選択を他人に罵倒されない程度には誤らなかつたつもりだ。だが、結果として君達を喪った。

そしてビグルス、グース、君達にそっくりな日本の少女達を君達の

代わりのごとく投げ所にしようとしている。

どうか軽蔑しないでくれ。

私はもう限界なのだ。」 献花

「そこにいるのはわかっている。出てこい、相棒、グース。」

「木陰から出てくる」

「どうやってついてきた？」

「車のトランクに忍び込んで。」

「なるほど。普段の私ならともかく、今の私なら騙せると踏んだ訳か。」

「うん。いつもと雰囲気が違うし、何より花を買って車に乗った時に暗い顔で何か呟いてたからさ。心配でしようがなくて。」

「ありがとう相棒。ここにある墓は、私の歴代相棒達のものだ。」

「これが。」

「私は、全力を尽くしてきたつもりだ。だが守りたいものは悉く手からこぼれて逝った。何が最年少の海軍大将だ。何が英雄だ。私は救いがたい低能だ。」膝を折る

「プロデューサーさん傘を！このままじゃ風邪をひいちゃいます！」傘をさす

「ありがとう、グース。」

「でもさ相棒、相棒は祖国を慣れない男手で守り続けてきたんでしょ？なら相棒は誰が守るの？」

「。」

「この人達はきつとそう思って相棒を守り続けたんだよ。アメリカを背負う相棒を命を賭けて守った。なら、相棒も自分をそんなに卑下したら駄目だよ。この人達が可哀想だもん。」

「そうかもしれない。そしてリン、私は君を5代目相棒に迎え、グース、君を次席副官に迎えたのだ。君達に頼みがある。」

「？」

「私は命を賭けて君達を守る。その逆は絶対に駄目だ。私は4度相棒を喪った。5度目はたくさんだ。そのような不名誉を負う位ならいつそ死んだ方がマシだ。」

「前にも言ったけどさ、相棒はもうちよつと自分を大切にしなよ。」

「レツシヤー家には家訓がある。『命はある程度粗末に擲つこと』というものだ。命や人権を何より至高とする日本人には理解できんだろうがな。尤も、そんな腐った考えを広めたのは他ならぬ日本の力を弱めようとしたマッカーサー元帥だが、私は、満足できずに燻って生きる位なら満足して誇り高く死ぬことを選ぶだろう。命は、粗末に擲つてこそ、その者の命は、魂は輝くのだ。相棒を4度、指揮下の部隊を1個壊滅させた私に名誉も不名誉も今更無いが、晩節を汚すことだけは絶対にご免被る。レツシヤー家の人間はどうせ長生きしない。55歳までもった者など少なくとも私が知る限りはいないのだからな。」

「相棒、まだ何か、隠してない？」

「バレたか。先週の健康診断で見つかった。大腸がん、ステージⅡ。発見があと1ヶ月遅れていたらステージⅢ、転移して死んでいただろう。イマニシの勘に感謝だな。ただでさえヤツには返しきれん借りがあつたのにな。」

「まだあるでしょ？」

「相棒は知っているだろう。戦闘機に乗り高高度をずっと飛び続けたり放射線を浴び続けるということ。成人あるいはそれに近い年齢で空を飛び始めたのならば、そこまで実害はなかったのだ。だが私の場合14歳の時から飛び始めてしまった。放射線によって私の身体は著しく老化した。そう、そのような弱体化した状態で大腸がんの

手術を受けたらどうなるか。生きて帰れるかも分からないし、もし生きて帰れたとしても君たちとともにステージに立てるかだろうか。

いや、立てない可能性の方が圧倒的に高い。自暴自棄と罵られてもしょうがない。

そういう一面があることもこの際否定しない。私は、恐怖していたのかもしれない。”家族”に疑われることを、捨てられることを。

頼む！相棒、グース。こんな情けない男としての価値など無い老人だが、どうか見捨てないでくれ！」土下座

「隠し事があつたのはいただけないけど、私も皆も相棒のこと見捨てたりなんかしないって。家族を捨てるなんてあり得ないよ。」抱き締める

「私もです。まだ3ヶ月しか一緒に働いてませんが、プロデューサーさんについてきてよかったです！私のプロデューサーは貴方以外有り得ません！」後ろから抱きつく

「ありがとうございます。今度こそ、”家族”を君達を幸せにして見せる！」

I've been serving the United States for 30 years to the best of my ability. I have done my

small part for the well-being
of the people of the United States
and my friend, President
Elizabeth Lauren. But I also
want to thank you. I want to
thank you, my partners, my men,
for all that you have done for
me. To my colleagues and superiors
who have given me opportunity
to excel. Especially to
my late comrades-in-arms who
spent their lives to serve me.
I dedicate the honor of being
given the title of Fleet Admiral
to the United States Navy
and my comrades-in-arms who
have fought with me now. I
am proud to have fought with
them. Thank you, my comrades
arms! From now on, I will serve
the people of the United States
and its allies in ways other
than military service. As a
star that shines on us all. Thank
you so much.

(私は、30年、精一杯合衆国に尽くしてきました。

合衆国国民の皆さんと我が友、エリザベス・ローレン大統領の幸福
の為に微力ながら尽力してきました。

ですが、同時に感謝したい。私に尽くしてくれた相棒達、部下達に
対して。

私に活躍の場を与えてくれた同僚、上官達に。

特に、命を費やして私に尽くしてくれた亡き戦友達に。

元帥の称号を与えられた榮譽を、今まで共に戦ってくれた戦友達に捧げる。

そして共に戦えたことを誇りに思います。

ありがとう、我が戦友達！

これからは、軍務とは別の形で合衆国と同盟国の民達に尽くします。

皆を照らす星として。

ありがとう。」敬礼

Oh, say can you see,
by the dawn's early light
What that proudly we hailed
at the twilight's last gleaming
Whose broad stripes and bright
stars,
through the perilous fight.
O'er the ramparts we watched
were so gallantly streaming?

おお、見えるだろうか、

夜明けの薄明かりの中

我々は誇り高く声高に叫ぶ

危難の中、城壁の上に

雄々しく翻る

太き縞に輝く星々を我々は目にした

And the rockets' red glare,

the bombs bursting in air,

Gave proof thorough the night

that

our flag was still there,

Oh, say does that star—spangle

d

banner yet wave.

O'er the land of the free

and the home of the brave!

砲弾が赤く光を放ち宙で炸裂する中

我等の旗は夜通し翻っていた

ああ、星条旗はまだたなびいているか？

自由の地 勇者の故郷の上に！

海軍元帥、若返る

レツシャー元帥のウワサ⑩

10年前からワタリガラスの夫婦“フギン”と“ムニン”を飼っているらしい。現在主人に合流する為ワシントンD.C.のレツシャーの別荘から移動（北太平洋を横断）中。小学3年相当の知能の持ち主らしい。

346プロダクション レツシャーの執務室

「グラビアだと？」

「「？」」

「うん。部長さんから直々の依頼だよ相棒^{バディ}。」

「イマニシから拒否権は無いな。で、誰に行かせると言ってきたんだ？」

「私と、李衣菜と相棒の水着姿も欲しいって。」

「そんなもの需要があるのか？961のガキ共にやらせれば良いではないか？身体中傷だらけの老人の半裸など、一部の変態にしか刺さるまい。」

「じゃあここに居るのは皆変態になるね？」皮肉る

「はあ。わかった。つべこべ言わずにやれば良いのだろう？」署名する

「ふふ。」

「レツシャーさん完全に凜ちゃんのお尻に敷かれていますね。」

「しまむーの言う通り。あれが正妻^{相棒}パワーだね。」

「ウヅキ、ミオ。そろそろ春用の宣材を撮ってこい。私も後で合流する。ミズキさん、今日の夕食は何が良いですか？」

「そうですね。提督はラーメンって作れますか？」

「12年前に1回きりだが、まあ何とかなるでしょう。めんどくさいですからやれる者にスープを託しますが。キョウコ。」買い物リス

ト作成中

「はい。」

「帰りにこれを買ってから家に戻れ。レシピは今更言うまでもあるまい。」リストを渡す

「じゃあスープは先に作っておきますか？」

「任せる。麺は私が打つ。」

「私の場合海鮮系ラーメンしか作れん。それしか知らんからな。ブリカマ、鯛のアラ、アサリをベースに日？昆布、鰹エキスも加えたスープベースのものだ。あつさりした味に特化している。で、何故貴様がここにいる？貴様に我が別荘のIDカードを渡した覚えはないが？」

「そりやくもうハッキングして入ったに決まってるんじゃない？叔父さん？んくやつぱり叔父さんはいいニオイだねく♪？」ハスハス

「貴様に『叔父さん』呼ばわりされるいわれは無い。」引き剥がす

「つれないにやく。」

「6年前の蛮行を思い出してみることだ。科学実験で私のお気に入ってた美術品もろとも貸してやったケンブリッジの別荘を吹き飛ばしたのだからな。何故大学でやらなかった？」

「そりやくねく、志希ちゃんの愛しい叔父さんを若返らせる薬を開発しようとしてたからに決まってるんじゃない？」

「また埒のあかないことを。」

「志希ちゃん6年かけて頑張りました。これが若返り薬のようなもの。」見せびらかす

「。」

「あれ無反応？叔父さん欲しくないの？」

「今まで私の失態で逝くべきではなかった多くの者が先に逝ってしまった。私には彼女らに対する責任がある。今更不自然に生き延びようとは思わない。346プロで働いてなければ来週のがん摘出手術も受けなかつただろう。だが、相棒やグース、今の”家族”に、生者に対する責任がある。当然、生者に対する責任は死者に対する責任に比して優先されるべきだ。だがその責任とて貴様に頼らずとも果たせよう。後5年もてば良いのだ。」

「まあ叔父さんならそう言うと思つてたよ。」

「それは臨床実験済なのか？」

「まだです。」

「貴様、私で実験するつもりだったのか？」

「そうですね。でね、これ、気化するんですよ叔父さん？」

「何毒ガス作つてんだ。」

「あくこのまま手が滑つて瓶が割れて気化しちゃったら、叔父さんの”家族”ほとんどみんな赤ちゃんになっちゃうね？これ強力過ぎて20歳未満服用御免だし？私はガスマスク持つてるけどね？」
瓶を落とそうとする

「わかった。実験も兼ねて飲めば良いのだろう飲めば。」ひったくる

「流石叔父さん、わかつてるね。」

「なんだこれは。シューコに食べさせられたカレーより不味いな。うぐっ」腹をおさえる

「提督!？」

「なんだこれは。がはっ」吐血

「相棒!しっかり!」

「あとこの薬は思いがけない副作用があつてね。本来人体に存在してはいけない生物も殺処分してくれるよ。」

「生物・ガン悪性新生物も殺処分してくれるのか。」

「その通り。でも凄まじく痛いから成人してないと服用はオススメしてませんってこと。」

「これは痛い・がっ」また吐血

「Pちゃん！」

「ミク、離れている・なんだこれは？」身体が収縮していく

「お、効果出始めたね。これで叔父さんはピチピチの34歳頃に戻りました。パチパチパチ。」拍手

「小さくなった。服のサイズが合わん。」ダボダボ

「レツシャーさんって34歳の時はこんなに小さくて可愛かったんですね！」

「34・太平洋艦隊副司令官の頃か。ミホ。」

「はい。」

「物置から廃棄予定のテレビを持ってきてくれ。」

「直ちに。」走っていく

「ふん！」バキバキバキ

「嘘!？」

「テレビがただのパンチで粉々に。」

「パワーが全盛期・からは程遠いが、身体が軽くなった。これならまたステージに上がれるな。」

「という訳で叔父さんに志希ちゃんから報酬を要求します。」

「ケンブリッジの別荘の弁償を免除してやる。それと今日は夕食をこ

こでとつていけ。それでチャラだ。」とりつく島無し

「つれないにや。」

「それより、相棒。」

「とりあえずこれで良いかな？」海軍陸上戦闘服を持ってくる

「そうだな。ミホ、明日服屋に寄って適当に身繕って買ってきてくれ。」万札を渡す

「わかりました。」

「これでは格好がつかんが致し方ない。相棒、このままでは麵をこねられん。私を持ち上げてくれ。」着替えた

「こう？」抱っこして持ち上げる

「ありがとう。」

「提督、脚立は無いんですか？」

「一応ありますが物置のかなり奥にしまつてありますから出そうとすると煤とホコリまみれになります。それなら相棒に抱えてもらった方が早い。」麵を伸ばす

カー　カー　ワタリガラスの鳴き声

「以外と早かったな。キョウコ、入れてやれ。」

「はい。」窓を開ける

「皆に紹介する。私が10年前からワシントンD.C.の家に置いていたワタリガラスの夫婦『フギン』と『ムニン』だ。」

『ハジメマシテ』

「「カラスが喋った！」」

「コイツらはカラスではない。より高い知能と誇りを持った”ワタリガラス”だ。今後は間違えないように。で、フギン、ムニン。どうだった北太平洋は？」

『サムカツタ。クンレンコウカイチュウダツタダイサンカンタイノ”

ボクサー”ニノツテラクニオウダンシテキタヨ。』

「お前達”ボクサー”に乗って来たのか。道理で早かった訳だ。」などで

『ゴシユジンアタラシイ”カゾク”フエタネ？』

「そうだな。私の新しい家族だ。仲良くな。」

『Aye sir !!』

さて、では寝る前のミーティングを始めよう。

「ではまず前提条件から確認しておきたいと思う。私が元帥の称号を与えられたことに伴い私と共に働いている諸君に対しても名誉的措置として我が合衆国海軍の階級が授与された。それは既にわかっていると思う。

問題はその先だ。その措置に伴い我が海軍作戦本部ではこのような計画が持ち上がってきた。」

Jointly with 765 production and
346 production
United States 8th Fleet for
matron plan
合衆国海軍作戦本部
ONNO

「765プロダクションと346プロダクション協同による第8艦隊編成プラン アメリカ海軍作戦本部」・相棒、これって。」

「私は本来はこのプロダクションで働かず、退役したら直ちにハワイトハウス入りする予定だった。皆は知らないかもしれないが我が合

衆国の中将や大将は退役した後、暫くしたら国防関係の仕事や諜報・防諜関係の仕事に文民として再就職することが多い。

本来であれば例にもれず私もそのはずだった。実際、国防長官が私を呼び寄せるのも時間の問題だった。

だが、大統領でもあり私の旧き親友でもあるエリザベス・ローレンがそれに強硬に反対し国防長官は私を補佐役として呼び寄せることを断念せざるを得なかった。

だが身体に欠陥があるとはいえ私が使えないわけではないことは明らか。国防長官も大統領を怒らせずに私を有効利用する方法を熟慮の末、海軍作戦本部付の宣伝塔として使うことを思いつき、このような計画を765プロダクションと346プロダクションに持ち込んだのだ。」

「具体的に第8艦隊はどんな任務を託される予定なの？」

「我が陸海空軍・海兵隊の宣伝だ。相棒とリイナ・ミホ・キョウコは知っての通り合衆国海軍のナンバーズフリーストの司令官には中将をもつて充てられることになる。参謀長は大佐。そして指揮下にある任務部隊にも司令官として准将ないし大佐が着任する。」

そしてその下に下級将校・下士官・水兵で構成される任務部隊が作戦本部から委託された宣伝活動を担うことになるだろう。

司令官にはミズキさんが充てられる。副司令官兼参謀長は相棒、君に任せることになる。

私が昔率いていた第7艦隊なら11個の任務部隊が存在しているが、第8艦隊については現在765プロダクションとも協議中につきまだ詳細については詰めることができていない。だが少なくとも主要戦闘部隊である第80任務部隊（CTF-80）、第81任務部隊（CTF-81）については確定している。第80任務部隊はミナミ、君に司令官職を委ねるつもりだ。そもそもここにいる”家族”の中で提督としての地位を与えられているのはミズキさんと君だけだ。必然的に第80任務部隊については君に委ねるしかない。少々キツいしれないが頑張っただけ。アナスタシアはミナミの補佐として入れ。指揮下に入るのは私と相棒・グース・ミホ・キョウコ以外の

全員だ。

第81任務部隊は海外に他の任務部隊が展開する際に警護として同行する。第81任務部隊については元海兵隊員でもあったミホとキョウコが当然そこに入ることになる。765プロと346プロのバランスをとるためにも第81任務部隊については765プロから派遣されてくる者に指揮権を委ねる形となるだろう。ちょうど765プロにいるアイドルの中に元海兵隊将校がいたようだから彼女を持って司令官とする。」

プリンス少佐とは直接の面識は無いが、同じ海兵隊のよしみである以上ミホやキョウコとも上手くやっていってくれるだろう。プロファイル見て思わず笑ってしまった。年齢16歳だと二回りほど年齢詐称してるがよくバレなかったな。

「とりあえず確定事項は以上である。どのような宣伝広報活動をやらされるのか正直私も承知してはいないが、まず間違いなく言えるのは諸君の収入も激増するが同時に仕事も激増し海外での任務が委託される以上おそらく体を張った任務を少なからずやる羽目になるだろう。それを見越して、来週は基礎水中爆破訓練、第2段階・戦闘潜水に入る。期間は2週間だ。」

「相棒。今日も頼んで良いか？」

「うん、良いよ。」太股をさする

「。」膝枕して貰う

「最初に比べて大分素直になったね。」頭を撫でる

「そうだな。相棒、私は最早君無しには生きていけないだろう。だが、シキに伸ばしてもらったとはいえ、5年の余命が15年に伸びただけだ。どう悪掻いても君を未亡人にしてしまう結末に変わりはない。今年の君の誕生日に、特別な贈り物を用意する。ワガママは承知の上だ。これからもずっと私の傍にいてくれるか、相棒。」

「うん。ずっと一緒にいてあげるよ。」

「ありがとう。友よ。最初は日本に来て良いか迷ったが、君と出会えて良かった。」

レッシュャー元帥のウワサ⑰

LINEは絶対に使わない。WhatsAppを主な連絡手段としているらしい。

海軍元帥、グラビアに挑戦する

如月千早のヒミツ②

レツシヤール元帥の影響を受けた結果戦闘機ゲームが大好きでありTACネームは大好きな音楽家ベートーベンの名前にあやかり”^{ルトヴィヒ}Ludwig”らしい。愛機はF-15E。寧猛熾烈な戦いぶりから”冥王”とエスコン界限では呼ばれている。尚、弟であり2番機でもある優のTACネームは”Elf”だが、その鮮やかな飛び方と無類の強さから”妖精の王子”と呼ばれている。第8艦隊編成に伴い第82任務部隊（CTF-82）司令官たる少将（川島瑞樹司令官、渋谷凜参謀長に続く第8艦隊のNo.3）として着任予定。

F-15E ストライクイーグル

マクドネル・ダグラス社（当時）が開発した、F-15制空戦闘機の改良・派生型で、第4・5世代ジェット戦闘機に分類される複座の戦闘爆撃機である。

元々空戦性能が高く兵器搭載量も多かった従来のF-15シリーズを母体に改修、一流の対空性能に加え対地攻撃用の航空機（爆撃機・攻撃機）顔負けの搭載量を誇る使い勝手の良い（ただし高価だが）マルチロール機となった。

最上静香のヒミツ①

アイドル業就職への報復として家から勘当した父親への復讐心が強^{復讐}い。どれ程ヤバいかと言うと師匠の千早から”Payback”のTACネームを授けられる程凄まじいらしい。尚、父親への復讐心（とトラウマ）から男性への不信感があるらしい。エスコンでの愛機はF-15C。現在如月家に居候中。

F-15C イーグル

大型制空戦闘機で、第4世代ジェット戦闘機に分類される。F-4と共に、冷戦下のアメリカ空軍とマクドネル・ダグラス社を代表する戦闘機。

チタンを多用して軽量化した機体に大推力のターボファンエンジ

ンを2基搭載し高い格闘能力を有すると同時に、高出力パルスドップラー・レーダーと中射程空対空ミサイルの運用能力も併せ持ち、遠近の空対空戦闘に対応可能となっている。原型機の初飛行から既に40年経った現在でも世界トップクラスの性能を誇る。

数々の実戦経験がありながら、イラク戦争の砂漠の嵐作戦で2機を失った以外に採用国は現在までに空中戦における被撃墜記録は無いとされる。

レツシヤー元帥のウワサ⑱

尉官時代（湾岸戦争時）、共同撃墜は仲間譲り、男でありながら全く傲慢さが無く紳士的で敵機を撃破してもパイロットをなるべく殺さない戦い方から”蒼い彗星”と畏れられたと同時に、”パーツイザアル天駆ける騎士””ブルー・バロン蒼男爵”と敵味方から称賛されたらしい。

佐久間まゆのウワサ①

東日本大震災当時に助けてくれたアメリカ海軍軍人に運命を感じたらしい。

「僕にも責任がある。僕の写真で偽の希望を与え、僕を不死身の象徴にして兵を戦地に送る。兵は死ぬのが任務だ。でも士官として”死ぬ”なんて命じられない。だから仲間と飛んで、一緒に死ぬ。ワシントンD・C.が僕に望んだ不死の神でいたくはない！」

2035年出版 渋谷凜 ・ 如月千早 共著

『レツシヤー提督の物語 1:湾岸戦争』第3章「ブルー・バロン蒼男爵の誇りと覚悟」より出典

Facebook

346プロダクション シンデレラプロジェクト（公式）

担当プロデューサー挨拶

皆様方におかれましては、常日頃から私達の活動に関心をお持ち頂くとともに、ご理解並びにご協力を賜り心より感謝申し上げます。

私がシンデレラプロジェクトプロデューサーに着任し、お陰様で無事に半年を迎えることができました。

別れと出合いの連続、気温が不安定となり体調を崩しやすい季節になりました。

皆様におかれましても、健康にはくれぐれもお気をつけてお過ごし下さい。

私事になりますが、2月30日付をもって、大統領より元帥の称号を与えられました。第二次世界大戦後初めてとなる合衆国における元帥の誕生に伴い記念として我が合衆国海軍に新しい艦隊が一つ創設されることとなりました。皆様に我が合衆国陸軍・海軍・空軍・海兵隊について深く知っていただくための情報発信を行う艦隊です。現在部隊編成を検討中ですので、続報をお待ちください。

これからも我がシンデレラプロジェクトに対し恩顧の程宜しくお願い致します。

2016年3月1日

Former COMUSINDOPACOM

FADM・William・Lescher・Ichino

se Jr.

2016年4月12日 ハワイ ワイキキビーチ

「今回の仕事は765プロダクションと合同だ。それにおそらく第8艦隊の同僚として働く者達だ。失礼のないようにな。相棒、^{パティ}リイナ。」

「了解！」

「うん。」

「初めまして、ですね秋月律子さん。346プロダクションのウィリアム・レッシャーです。そのお見事な手腕はチハヤから聞き及んでいます。今回は宜しくお願い致します。」名刺を交換

「ありがとうございます。こちらこそ宜しくお願い致します。」名刺を交換

「チハヤ、調子はどうだ？」左手を出す

「ぼつちりです！」握手

「で、彼女が。」

「はい。後輩の。」

「最上静香と申します。TACネームは”Payback”です。宜しく願います。」敬礼

「ウィリアム・レッシャーだ。チハヤが君を腕の立つ弟子だと誇らしげに言っていたから期待している。今回は宜しく頼む。」敬礼

「はい。頑張ります。」

「それと撮影が終わったら一杯付き合って貰いたい。チハヤから君のカウンセリングを依頼されている。私としても世界中の全ての男が傲慢極まるクソ野郎ではないことを知って貰いたいのだ。チハヤの流れを汲む者ならば特にな。」

「わかりました。」

「え／＼／レッシャーさんそんな際どい水着で撮影するの？しかもパーカー前開けちゃってるし。」

「イマニシからの依頼だからな。それに『傷だらけなのが唯一のネックだけど男ながら筋肉自慢のその肉体をメディアに示すのも我が祖国にもたらず光になる』と大統領からのお達しだ。」かなり短い白パーカーと黒いブリーフの水着

「／＼／凜ちゃんなんで止めなかったの？」

「私が止めても意味ないよ。部長さんの依頼を相棒は絶対断らないもん。」

「ほら行くぞリイナ、相棒。」

半裸がなんだと言うのか。リイナも初心なものだな。私の”家族”になったのだからその程度には耐えられるようになって貰いたいものだ。

「765プロ、346プロの皆さん本日はありがとうございました。
また今度も宜しくお願いします。お疲れ様でした！」
「「お疲れ様でした！」」

「さて。では撮影が終わったから皆さんを私のホノルルの別荘に招待
しよう。だがその前に秋月さん、チハヤを少し借ります。相棒^{パディ}、リイ
ナと最上さんと秋月さんを連れて車で待機している。皆さんを案内
してやってくれ。」キーを渡す
「わかった。」

まさかチハヤと二人きりで夕方のワイキキビーチを歩く日があるとは思わなかった。

「チハヤ、いくらワイキキとは言っても4月に水着の撮影だったから寒かったな。」

「はい。でもこういう雑誌は今頃撮影しておかないと間に合わないんです。」

「なるほど。私は衣服系の雑誌を読んだことが無い。これから色々教えてくれ。それとその青い水着、似合っているぞ。」

「／／ありがとうございますウイル。」

「・そういうえば、今確認することではないが『貧相過ぎることに悩んでいる』とユウから報告を受けている。そこまで気にするものなのか？」

「。。」

「確かに私の長い付き合いの奴らや2代目以外の歴代相棒はお前のところの三浦さんと良い勝負の抜群なスタイルの持ち主ばかりだが、必ずしもそれが私の好みに直結する訳ではないぞ。この際言っておくが私の女の好みは『必須ではないが黒髪ロング、合衆国国歌を魂込めて歌える奴、個性が強い奴』だ。どれもお前に合致しているではないか。私は11年前、お前に聞かせて貰ったやつ以上の美しい合衆国国歌を聞いたことがない。」

「・すみませんウイル。勝手に悩んで相談もしないで。」

「私の方こそはつきり言わずにいて済まなかったな。だが、お前は今まで私のかげがえのない”親友”であった。これからも、その事実は変わらない。私が死んでもな。」千早の右手を握る

「／／／」

「それと。指輪を出す

「!？」

「それは私の母タヤ・レツシャー・イチノセⅡスチュアートの遺品

だ。そして私の左手人差し指にあるのは父ウイリアム・レツシャー・イチノセ シニアのものだ。これと対をなす指輪だ。父と母は『真の友と出会う愛を深めたならその証としてこれを分かち合え』と言い遺し死んだ。お前こそその真の友だ。受け取ってくれるか？」差し出す

「／／／ウイル、ありがとうございます。」受け取る

「皆が待っている。行こうチハヤ。」

ホノルル ワイヤアラエ地区 レツシャーの別荘

「さて私の愛する”家族”達、律子さん、静香さん。改めて私の別荘へようこそ。歓迎する。」

「ありがとうございます。」

「今夜と明日はゆっくりして欲しい。では、夕食にしよう。今日は鶏胸肉のステーキとレタス・玉ねぎのサラダだ。ステーキにはこの玉ねぎのソースかトマトソースを使うと良い。」

「わざわざありがとうございます提督。」

「ご馳走になります。」

「では静香さん以外は風呂にでも浸かって疲れを癒して貰いたい。相棒、風呂の位置は覚えているな？」

「うん。あの黒い扉でしょ？」

「そうだ。」

「さて。では静香さん、カウンセリングを始めよう。とはいっても私は何らの資格も持つてはおらんからカウンセリングのような代物だ
がな。」隣のカウンターに座る

「。」

「君の父君のことはチハヤから聞いている。ま、そうだな、君の思うこととはわからんでもない。控えめに言つてクソ野郎だ。」

いくらアイドルが不安定だからと言つて真正面から娘の考えを否定しあまつさえ背いたら勘当というのは流石にやりすぎだ。

だが残念なことにそのようなクソ野郎が世の中の男の大半を占めているのもまた否定できんし、私とて小さい時から甘やかされずに育つた結果珍しい社会で働く男になっているからな。残念だがイレギュラーな存在なのだ。

85年にアナポリスを卒業し、87年海軍の戦闘機乗りとして最高の栄誉であるトップガンに入ることができた。トップガンになる前の訓練もなかなかキツかったが、トップガンに放り込まれてからもかなりしごかれた。だが、その時私に接してくれた上官達も同僚も部下もみんな私を、まあ小さかったというのものもあるだろうが、欲望の対象とはせず、息子のように扱ってくれた。

戦場で生き残ることができるよう、厳しくも優しく教えてくれたのだ。

私が思うにだ。大抵の男が傲慢極まってしまうのもその貴重さが過保護を招き、過保護が傲慢を招くからだ。全く愚かしい。ロムルスとレムスの昔から、子孫を残すにも、そもそも生きていくにも女性の力が必要だと言うのに、嘆かわしいことだ。」

「そもそも15歳にもなっていない者に『現実を見ろ』などと怒る行為自体がナンセンス。私に言わせれば過酷な戦場はおろか社会の表にすら出たことがない者に”現実”を語る資格などあるものか。そのような戯れ言はイラクのミグを叩き落としテロリスト共を射殺してから言え。」

「いや、酒が入るとよく口がまわる。すまなかつた静香さん。カウンセリングなのに私ばかり喋っていては意味がない。君の話聞かせて貰えるかな?」

「私が元帥に申し上げられることは二つだけです。父を許しません。そして男性が信用できません。それだけです。」

「残念だ。では私も信用ならんか。チハヤと10年の付き合いであるこの私が。」

「申し訳ありません。」

「別に責めてはおらん。だがユウとは、あやつとは仲良くやってくれておるのだろうか?」

「はい。優さん本人には言えませんが、声も父のように鋭くないですし、容姿も短髪なだけでほとんど千早さんと変わりませんから、スト

レスなく一緒にお仕事ができています。」

「そうか。ユウは確かに優しい声色をしているからな。それに引き換え私は威圧感しかない声色だ。すまん。この声自体がストレスだろう。だがな静香さん。」

「？」

「賢者は歴史から、愚者は経験から学ぶ。君はまだ経験しかない若造に過ぎん。どうだ？歴史を学ぶためにも我が海軍第8艦隊に来ないか？話はユウから聞いているのだろうか？」

「はい。」

「私やチハヤと来れば、今まで見えなかったものが見えるかもしれん。『できなきやできるよになれば良い』SEALSの訓練で私が教官からかけられた言葉だ。トラウマは心に隙をつくる。無くす努力はしておいて損は無いはずだ。チハヤのトレーニングについてこれなら、努力はお手の物だろう？」

「いささかベクトルが違うだろうか？」

「。うなづく」

「では765プロダクションに第8艦隊司令官の名で君の招聘を要請しておく。まあ十中八九要請は通るから大丈夫だろう。」

後でミズキさんに要請入れるよう言っておこう。第8艦隊は実質的には私の指揮で動くが、建前上の第8艦隊司令官はミズキさんだからな。建前は守らねば。

「いや、流石に暑い。」

チハヤが上にまたがり私の胸を枕にし、相棒が左腕に引っ付き、私より先に家を掃除してくれていたグース悠貴にいたっては右足を抱き枕にしている。疲れたからだろうな。相棒とグース悠貴はもうぐっすり寝てやがる。

「降りた方が良いでしょうか？」

「いや、暑いだけでお前は全く重くないからなチハヤ。降りる必要はない。それに、”家族”とのふれあいは大事だからな。こういう一時を大事にして生きていきたい。ふと思ひ出したぞ。11年前、転んで泣いていたお前に膝を貸して落ち着かせたらいつの間にかお前がすやすやと寝てたことを。」

あの時のチハヤもユウも小さくて可愛かった。昔はこいつら姉弟をついつい甘やかしてしまった。今まで生まれた私の実子達に軍務もあるが父親をやってやれなかった分余計にな。

「／／／」

「人生で重要なのは誰に愛して貰え、誰を愛したか。誰を愛して、それを決して後悔しないか。その点失敗ばかりだった人生も、案外悪くはなかった。お前は私を愛してくれた。私もお前を愛し、またそれに後悔していない。私は、犯してきた悪行の割に合わない果報者だった。改めて礼を言う。チハヤ。」千早の頭を撫でる

「／／／」 うつぶせになる

ベス、お前は僕が武勲立て栄達するのを喜んでくれないのか？

そんなことあるはずないでしょ。ただねウイル、あまり武勲を立てることに焦る必要は無いと思うのよ

焦ってなどおらんよベス。だが、機会があれば最大限に活かすのは当然だろう

ウイル、あなたはまだ30歳にもなっていないのよ？それで中佐、もう少しで大佐になれる。十分すぎるわ。無理をしないで欲しいの
間もなく30になる。40歳にも、50歳にも。そうなれば、地位も名誉も、不相応のものにはならないだろう

その後はどうするの？そしてその後はどうするの？更なる高みを望むの？

まだ山の中腹に達したばかりだ。人生昇っていると思ったら、降りているなんてことも有り得る。あまり後のことばかり考えても仕方あるまい。

そうね。グース少佐。お願いするわ。このわんぱく坊主が、道から外れないように見張っていてね。放っておくと、どこに飛んでいくか、わからない子だから。

はい。ローレン議員。任せて下さい！

ひどい言い様だな。僕は子供か

懐かしい夢を見た。ベスは私がこうなることをわかっていてグースに託したのかもしれない。本来であれば私が F-35Cをテストし空中分解で死ぬ運命にあったのをグースが急遽代わり、そしてグースは結果的に私をかばう形で死んだ。グースもそうだったが、私の歴代相棒達は命を賭して私を守り続けてくれた。そして私が道を外さないように見張り続けてくれた。

私は残された。生き残った者は、歩き続けなければならない。いつか死者に合流するその日まで。あいつらに誇らしい土産話を持っていく為にも、これから10年は、私は5代目相棒源と、他の”家族”と共に全力で取り組んでいきたい。

海軍元帥、運動会に引き摺り出される

第8艦隊編成の前準備として346プロダクションのカフェで親交を持ったサチコ、カエデさん、カナデさん、カレン、ナオ、アンズ、ナナそして第7艦隊司令官時代から顔見知りだったシユーク、サエ、ハジメそして太平洋艦隊司令官時代に瓦礫から助けて仲良くなったマユが新たに私の指揮下に加わることになった。池袋の私の別荘は7階立てだから受け入れはそこまで問題にはならん。私やキョウコが作る料理の量が半端なものではなくるのが唯一の問題だが、それもミズキさんや相棒バディ、マユが助けてくれるから問題として顕在化したりはしないだろう。カエデさん昼間っから呑むのはやめて貰いたい。765プロダクションから出向してくる第8艦隊の将兵達も私が面倒を見ることになるのだろうか。

2016年5月

346プロ本社 レッシャーの執務室

「事務所別対抗アイドル運動会?」

「そう。やってくれるかい?」

「イマニシ、ピア絞首刑ノ線無政府状態・治安最悪かソマリア連邦共和国か。好きな方を選ばせてやろう。どっちが良い?」

「どっちにしても部長さんを殺す気で草。」

「いや、そう言わずに出てくれウィリアム。大統領からのお達しだよ?」

「ベスの名を出したら無条件でやると思うなよイマニシ。私は軍人だ。特殊部隊勤務経験もある。そんな奴が出たらバランスが崩壊するだろうが。」

「そこは心配無用。ハンデ付けること認めるからさ。頼むよ!世界は

君のエンターテイメントを求めてるんだ！」

「何がエンターテイメントだ。その先にあるのはただの元軍人の蹂躪劇だろうが。」

「…楽しそうじゃん。相棒、一緒にやろうよ？」

「…相棒、君までそんなことを言うのか？」

「私もレツシャーさんと運動会出たいです！」ワクワク

「グース・良かろう。だがなイマニシ、ハンデに加え更に一つ条件をつける。」

「なんだい？」

「私は集団でやる競技のみ参加する。」

「それじゃつままないからさ、一つだけで良いから個人競技出てくださいか？」

「…一つだけだ。これ以上は妥協せん。」

「ボクシング(アマチュア)に出てくれ。この前のグラビアでの君の肉体美が思いの外好評でね。その動く勇姿をメディアで示してくれ。」

「よかろう。最初のラウンドでK.O.してやる。」

「それと君だけ特別な運動着で出て貰うからよろしくお願いするね。」

「何を着せられても文句は言わんが、バスとキルラインを怒らせるようなのはやめろよ？火消しをするのは私なんだからな。」

「さあ皆さんお待ちかね！第11回アイドル事務所別対抗運動会の時間です！司会は私日高舞がお送りします！」

「解説の今西です。皆さんどうぞよろしく。」

「この番組の最高視聴率は第4回に34%を記録して以降、この記録を破った大会は未だにありませんでしたが、既に36%を超えています。今西さん、やはり要因は。」

「我が346のウィリアム・レツシャーでしょう。他の方々も魅力・見所があるが、やはり彼には及びません。しかも彼だけやけに露出度の高い特注の専用運動着で出場です。視聴率をもっと上がります。アメリカ大統領公認、渋々ですが本人了承済での出場です。どうかよろしくお願いします。」

「いや、相棒。いくらなんでもエロすぎるよ。」

「そうよ提督さん。国民が発情しちゃうんじゃないかしら？ 私達はもう耐性ついてるけど。」

「プロデューサー生足・腕のみならずヘソまで出して・風邪ひかない？」

「相棒、カナデさん、カレン。私だって不本意も甚だしい。だが、大統

領のみならずホワイトハウスが住人全員の連名で要請書を寄越してきたらもう逆らえん。」

346プロダクションからは私、相棒、グース、ミオ、カナデさん、サチコ、キョウコ、ミホ、アナスタシア、ミナミ、カレンが出場する。それにしてもイマニシめ。何が『特注の運動着』だ！ただの白シャツ（短すぎて胸以外隠せてない）と青いボクサーパンツ（これも短すぎ）だけではないか！しかもこの前のグラビアよりも薄い！私を晒し者にする気か！

「これじゃあエロいだけじゃなくてもはや生物兵器ね。」

「Правильно！このままでは他の事務所の人達が提督の破壊力に倒れて私達が不戦勝になってしまいます！」

「上官の命令は絶対だ。今の私の肩書は『大統領付最高国防顧問』である以上、上官たる大統領からのお達しには逆らえんのだ。」

それに、ホワイトハウスの主要な住人＝私の家族達の集まりだ。あいつらの子供達をせめて楽しませてやらねばならん。自分の父が頑張っていると見せてやらねばならん。父親らしいことなど今までやってやれなかっただけに余計にな。

「じゃあ動く時以外はコート着てようよ。まだ少し肌寒い時期だから着ても文句はいわれぬよ。」

「そうしよう。」コートを着て前を閉める

「それでも生足が見えてますから初心な子は気絶するかもしれませんね！」

サチコは余計なことを言うな！

「あいにくロングコートはワシントンD・C.の家に置いてきたからな。足ままでは隠せん。」

「さあ次はボクシングだあ！各事務所の筋肉自慢のアイドル達がトーナメント戦で根性果てるまで殴り合うーッ！」

「流石にアマチュア形式でフェイスガードを着けますので安心して下さい。ではいつてみましょう！最初の試合は765プロの現在の運動会で連覇中の王者、我那覇響 選手と我が346のウィリアム・レツシャー 選手！」

「千早の彼氏さん久しぶりだなー！」

「おはよう。相変わらずだな我那覇さん。チハヤから『最近優を困らせてばかりだからメてやって欲しい』と言われててね。すまんが容赦はできません。」ポーズをとる

「ラウンド1、開始！」カーン

「相棒がセンター制圧したからもう終わるかな？」

「ブヘッ」吹っ飛ばされる

カンカンカンカンカンカン ゴングが鳴る

「レツシャー選手、765プロの筋肉自慢、王者我那覇選手を53秒で下しましたア！歴代最速記録です！」

「まあ彼はアナポリス海軍兵学校時代からボクシングをしていましたからね。正直レツシャー選手よりも、衰えた（大嘘）とはいえプロの

軍人相手に50秒もった我那覇選手に敬意を示したいと思います。」

「響、一瞬だったね？」 スポドリを渡す

「真々聞いてくれよ〜！」 抱きつく

「どうしたのさ？」

「正直男のニオイは優で慣れたと思ってたから油断した！千早の彼氏さん優と全く違うニオイがするんだ〜！」

「そんなに違うの？」

「優の庇護欲を誘うニオイと違ってあの人の汗から女の本能を刺激する強烈なニオイが来てクラクラしちゃったんだよ〜ッ！っていうか格好もめっちゃくちやエロかったし〜！」

「だから響最初の一瞬止まっちゃったのか。確かにあの格好は扇情的だったね。」

「346の奴らズルいぞ〜！こんな卑怯な作戦とりやがって〜ッ！ハム蔵オー自分を慰めてくれ〜！」 ハム蔵を捕まえる

「いかん。右手首がやられた。」腫れてる

「相棒、大丈夫？」^{バディ}湿布を包帯で固定

「次はリレーだったな。走る分には問題あるまい。SEALSにいた頃は捻挫してでも最後まで走ったのだ。これ位どうということはない。ありがとう相棒。」

「うん。でも無理はしないでね。」

「ああ。」

「凜さん。」

「千早さん。」

「ウイルの手首は？」

「一応応急措置はとりました。念のため後で病院に連れていきます。」

「そうね。ウイルは病院嫌いだけれど、嫌がったら私達で強制的に連れていきましよう。」

「はい。」

「さあ！次は5000メートルリレーだア！！5人でリレーしてポイントを稼げエー！」

「今回我が346プロダクションはレッシャー選手が3500、乙倉選手1500の割り当てで走る特例が適用されます。レッシャー選手は元軍人、乙倉選手は東京都中体連で短距離とはいえトップ選手です。ですので他の事務所の方々とのバランスを取るための措置をとっておりますのでご了承下さい。」

「グ^悠ース、最初は任せる。後半は何とかする。」

「はい！前半は任せて下さい！」

某事務所所属 ??? サイド

「ん？あの人。」

「浅倉、どうしたの？」

「ほら樋口、あそこの人。」指差す

「最近話題になってる珍しい男の元軍人アイドル。346プロのウイリアム・レツシヤー。聞いたことくらいあるんじゃないの？」

「小学生の時あの人昔会ったことあるかも。」

「どうせ勘違いでしょ。いくら珍しい社会に出てる男の人でもそんな天文学的確率ありえないから。」

「そうかな。」

ちよつと興味が湧いた。機会があつたら話しかけてみたいな多分あの人だ。

「さて、ガキ共。ファ○クされる用意はできてるか？小便は済ませたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK？」

346プロ用待合室

「いや、相棒煽りすぎ。しかもしれっと放送禁止用語ってるし。」

「後でお仕置きね。」

「じゃあ今夜は美波と私で相棒にお仕置き（意味深）する？」

「そうね。たまには私も混ざりたいですし。」

「すまんグース。私の失態だったな。」

「いいえ！そんなことありません！レツシャーさん頑張ってたじゃないですか！それに2位ですからまだ総合順位は巻き返せます！」

「そうだよ相棒。次のドツジボールは相棒の独壇場になるからまだ稼げるよ。」

「次は2分で終わらせる。協力してくれ相棒、グース。」

2日後 346プロ レッシャーの執務室

「すまんイマニシ。私がいながら優勝できなかった。」

「いやいや。2位までいければ十分我が346の宣伝はできるから大丈夫だよ。それより専用運動着の件の償いと頑張ったご褒美を兼ねて新しいアイドルをシンデレラプロジェクトに編入することにした。先週スカウトしたばかりの新人達だから、鍛えてやってくれ。入りたまえ！」

「失礼します。」!

「!?イマニシ、お前。」

「堀裕子君、水本ゆかり君だ。じゃあ後は頼むよ。」退室する

「あの野郎またか！」机を叩く

「!?」ビクッ

「すまないね二人とも。そのソファへかけたまえ。いきなり驚かせて悪かった。私はシンデレラプロジェクト担当プロデューサー兼アイドル筆頭であるウィリアム・レッシャーだ。君たちの直属の上司ということになる。イマニシからはなんと聞いている?」

「はい!プロデューサーさんと一緒にアメリカ軍の宣伝をアイドルやりながら頑張っって欲しいと言われてます。」

「そうか。奴がどれだけ私のことを言っていないのかがよくわかつ

た。まあそれは良い。いきなりで申し訳ないのだが君達二人は寮に住んでいるはずだ。寮から池袋にある私の別荘へ引越してもらおう。そこで現在のシンデレラプロジェクトのメンバー達と共同生活をしてもらおう。共に助け合いながら自分を高めていてほしい。さらにもう一つ。出来る限り私のそばを離れるな。一緒に仕事をしてほしい。それと私はもともとアメリカ人なもので 日本語の名前では少々呼びづらいところがあるので二人にはあだ名をつける。堀裕子さん、あなたには”マールン”というあだ名を与える、水本さんには”ランスロット”このあだ名が不快だというのなら取りやめてなるべく名前と呼ぶようにするが、それで良いか？」

イマニシめ！一体どうやって見つけてこの二人をスカウトしてきたのだ！本格的に私の過去を蒸し返すつもりか！

「相棒！聞こえるか？速度を落としてレバーを引け！脱出しろ！」
「ははっ。駄目です。キャノピーが飛びません。それに、こんなに血が。」

「それでもトップガンか！私に相棒をまた喪えと？諦めたら、そこで試合終了なんだよ！全力を尽くせ！」

「望み薄ですが、着水してみます。レツシヤー大佐。」

「なんだ？」

「貴方と飛べて、幸せでした。貴方が相棒で、良かった。」バアン
「!!」

「F-35試験機、空中爆発しました。」

「生存者を探せ。」

「ですが、大佐。」

「探し出せ！なんとしてもグースを見つけろ！死んでたら生き返らせろ！何をしてもここに連れて来い！」

「ラ ラジャー！」退室する

「グース、何故私にやらせなかった」

海軍元帥、年末年始の調整に入る

Admiral William Leisher. Ich freue mich sehr, Sie einzuladen, das Neujahrskonzert im nächsten Jahr zu dirigieren. Ursprünglich hatten wir geplant, Ozawa einzuladen, um unter seiner Leitung aufzutreten, aber aus gesundheitlichen Gründen hat Sie als seinen Ersatz vorgeschlagen. Als letzter Schiller geliebt den Karajan und als erster Anhängers seiner Stilisten. Ich hoffe, Sie nehmen es an.

Wiener Philharmoniker

2016年10月4日

池袋 第8艦隊司令部 庁舎5階 艦隊顧問執務室

「何故よりによって私なのだ。」

「ウイル？」

「チハヤ。名誉なことだがとんでもない仕事の依頼だ。ウイーン・フィルハーモニー管弦楽団が 来年の新年コンサートの指揮者に私を指名してきた。」

「!？」

「公にされていけないことだが、私はお前の大好きな伝説の指揮者カラヤン先生の最後の弟子なのだ。それに何よりウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の古参連中は当然幼い頃の私のことをよく知っている。だからこういう形で推薦してきたのだろう。そもそも小澤さんがやればよかつたのになぜ私に押し付けたのか。『健康上の理由』とか絶対に嘘だろう。」

「指揮者は脊椎に負担がかかります。私としてはあまりやって欲しくは無いのですが。」

「私は生涯において三つだけは最低限誇りを持って生きてこれた。一つは生涯一度たりとて虫歯にかからなかつたこと。二つ目は約束を一度たりとて違えなかつたこと。三つ目は誇り高き合衆国海軍の戦闘機乗りとして一度たりとて墜ちたことも僚機を墜とされたことなかつたこと。生前のカラヤン先生に『クラシックの衰退を止める為の努力を怠らない』と誓約した。誓いは、必ず守らねば武人の恥というものだ。心配してくれるのはありがたいが、わかつてくれチハヤ。千早の肩を叩く

「無理はしないで下さい。最近ウィルは働き詰めですから。」

「そうだな。どうせならローマで第8艦隊の新年路上ライブでもやるか。で同時に新年休暇も入れよう。相棒パティ、イマニシに連絡をとれ。協議する。」

「わかつた。」

「なるほど。年末に第8艦隊の業務の一環で欧州軍（アメリカの統合軍。ヨーロッパを担当）の紹介とサイレンサーでベーコンを焼くネタ動画の撮影。シンデレラプロジェクトの一環でローマのスペイン階段で路上ライブ。お年始は君の仕事でウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者を新年にやる。なるほど、わかつた。必要なものはこちらで手配しておくよ。」

「助かる。私のプライベートジェットでは流石に第8艦隊将兵全員を運べないからな。」

「まあ、国防総省ペンタゴンに旅費の申請と美城航空に旅券寄越すよう要請出すだけだから私の仕事はむしろ減ってるんだがね。」

「ローマと欧州軍司令部には私から交渉しておく。銃とサイレンサーはキョウウコに用意させる。問題は警備だな。もし戦闘が発生しても、戦えるのは私とミホ、キョウウコ、765プロダクションのプリンストン少佐だけだからな。」

「欧州軍司令部に護衛を供出して貰えないか聞いてみたらどうかかな？」

「欧州軍司令部にあまり借りを作りたくないが、やむを得ん。その線？でいくか。」

スカパロツティは元気にしているかな。アイツは私の“家族”の中では飛び抜けてお転婆な奴だったからな。心配になる。

第8艦隊司令部 庁舎3階 大会議室

「諸君、私にとんでもない仕事が入ってきた。」

「具体的にはどのようなお仕事が？」

「次の仕事はオーストリアの首都ウィーンだ。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の来年の新年コンサート指揮者の打診が来た。」

「提督さんは指揮者もできるのかしら？」

「カナデさん。私のはかの”楽壇の帝王”ヘルベルト・フォン・カラヤンの最後の弟子でした。小澤さんには及ぶべくもないが、それなりに指揮はできます。”万能なアイドル”を名乗っているのですから、それくらいのことではできませんと。」

「いや万能過ぎて草。」

「本題はここからだ。先ほど相棒パティからも働きすぎを指摘され、諸君も諸君で本業に加えて第8艦隊の業務も担ってもらっている以上疲れが溜まっていることは明白だ。年末はともかく年始は休みたいが、私も諸君も残念ながら人気があり休暇の確保は容易ではない。なので

先ほどこイマニシから提案があり仕事の体で。まあ事実仕事はするが、年末は私が休み、そして年始は諸君が休むという体裁をとりたいたいと思う。具体的に言えば、年末において我が合衆国の統合軍の一つでもある欧州軍の解説を現地で行いなおかつ欧州軍司令官たるスカパロツティ大将との会談も行う。そして私とミホ、キョウコ、プリンストン少佐で銃に装着したサイレンサーにベークンを巻いて発砲の熱で焼くというしようもないネタ動画も同時に撮影する。そしてローマのスペイン階段で合同ライブを行い、今年の諸君の仕事は終了だ。それまで私は休ませて貰う。で私はお年始に諸君と交代で指揮者として仕事をする。ウィーン・フィルからは最後に『美しく青きドナウ』『ラデツキー行進曲』さえ入れてくれれば好きに曲を指定して良いと言ってきた。が、期限は来週までにとも言われている。チハヤ、相棒^{バディ}、マユ、ミナミ。」

「「「?」」」

「君たちの昨今の活躍と私に対する貢献、そしてクラシックを嗜んでいることを鑑みて、君たちに尋ねる。私に何を指揮させたい?」

「私達と言えば相棒^{バディ}が指揮してくれるの?」

「そうだ。とは言えんがなるべく要望には応える。」

「私は相棒の『ボレロ』を聞いてみたいな。」

「『ボレロ』? 相棒、私を試すつもりだな? よかろう。試されてやる。」
リストに記入する

「・ウイルは『運命』は指揮できますか?」

「当然だ。カラヤン先生から散々しごかれたからな。」 記入

「まゆはレッシャーさんの『新世界より』第4楽章を聞いてみたいです。」

「・私の好物だ。マユ、任せておけ。」 記入

「私は『さまよえるオランダ人』序曲を聞いてみたいですね。」

「また変なものを指定してきたなミナミ。よかろう。あまり得意ではないが、やってみせよう。」 記入

「相棒。」

「どうしたの？」

「明後日愛知の衣浦に出かけるんだが、暇だっただろう？一緒に来ないか？」

「他の皆は？」

「珍しく君以外は何かしら仕事がある。グース^{悠貴}は靴の商材撮影のモデル、マール^{ユッコ}リンは大塚警察署の一日署長、ランス^{ゆかり}ロットはサチコに巻き込まれバンジージャンプだそうだからな。」

「なるほどね。愛知に何しに行くの？」

「魚を仕入れてくる。皆に私が目利きした新鮮な魚で美味しい料理を作ってやろうと思っただけ。衣浦は地味だが美しい港町だ。些か雅さに欠ける上日帰りになるが新婚旅行代わりにと思っただけ。」

「時間があれば相棒の故郷に行きたかったな。」

「遅かれ早かれ連れていく。安心しろ。」

「楽しみにしてるよ。そういえば相棒。」

「？」

「悠貴と美波が。まあ私もだけど疑問に思ったことがあってさ。」

「なんだ？」

「何で奏さん、川島さん、楓さんだけには敬語な上にずっとさん付けな

の？」

「ああそのことか。理由は簡単だ。あの3人が亡き母にそっくりだからだ。」

「どこか似てるの？あまり共通点はなさそうだけど？」

「性格や趣味の話ではない。あの3人には貫禄がある。覇気と言うべきかな。独特な何かがある。それがあまりに亡き母タヤにそっくりだ。我が家では私は母に絶対服従だった。逆らうことは許されない。母の恐怖は今も身体が覚えている。だから私はあの3人には逆らえない。逆らうことを身体が拒否しているのだ。」

「その事は3人には言わない方が良いでしょう？川島さんはともかく残りの二人はそれ知ったら調子に乗る可能性があるから。」

「そうだな。相棒。」

「？」

「ありがとう。」頬にキス

「ふふ。どういたしまして。」

ベスや他の相棒とはついで育めなかった愛をやっと手に入れた。ファイターパイロット戦闘機乗りとしての誇りも、30年の軍務も、元帥の地位も、私の心を満たせなかった。だがこの1年で私の心はとても満ち足り、そして穏やかだ。ありがとう相棒。

「本日付けでレツシャー准将の副官を仰せつかりましたフレデリカ・マリーリン”マテウス大尉であります！よろしくお願い致します閣下！」敬礼

「ご苦労。よろしく頼む。」答礼

「はい！」

「あまりこのようなことは聞きたくないが、君のアナポリスでの卒業席次は何番であつたか？」

「いや、その小官は下から数えた方が明らかに早い席次でしてその。」

「そうだろうな。マテウス大尉。率直に言おう、君は捨て駒にされた。君も知つての通り私は隸下の部隊を何度か壊滅させ、相棒を二人失っている。将官の副官というのはその将官の業務を一部代行する以上、優秀な者でなければならない。だが君も自覚していると思うが君は優秀ではない。私は隸下部隊と副官をよく死なせる”死神”だ。どうせ死ぬのなら、捨て駒にしても全く困らない者を私の副官に」という話で私のところに君が来た。おそらくそういうことなのだろうな。」

「」絶望

「安心しろ」とは言わん。だが私を信じて欲しい。立場が逆だが、君を守って見せよう。私とて、部下と副官を失うのはもうまっぴら御免だからな。」

聞いてくれマリーリン。私は君と出会った時に宣言したな？君を護ると。それを果たせず、あまつさえ私を狙った爆弾テロに巻き込まれてしまった。そんな私だが、君に姿形がそっくりで、君に似て頭の回らぬ馬鹿で、君に似て陽気な超能力者（笑）の日本の娘を懲りずに副官にすえてしまった。もはや君を馬鹿と罵倒する資格は無いな。こんな脆い馬鹿を通り越して愚かな私を、どうか、赦してくれ。

海軍元帥、プロデューサーする

2017年7月 池袋

レッシャーの別荘 4階 リビングのソファア

「アナスタシア。」

「どうしましたか提督？」

「こつちへ来い。隣へ座れ。」

「私の膝を枕にして寝そべれ。」 太ももをさする

「？」 膝枕してもらおう

「。」 アーニヤの頭を優しく撫でる

「アー・提督？」

「お前の内心は、ある程度わかっているつもりだ。かつて私もそうだった。私は日本人と本国人のクォーターでありドイツ系アメリカ人の血も入っている。見た目から本格的なアメリカ人からは日本人扱いされ、純粋な日本人からはアメリカ人扱いされる。若い頃、任務中の私の居場所は空母フォレストル、インディペンデンス、ジョージ・ワシントン、ロナルド・レーガンのカラオケ部屋にしかなかった。居場所が無いというのは本当に辛いものだ。第8艦隊に属する者でお前を余所者扱いする不届者はいまいが、かといってお前の内心をある程度理解できるのは今のところ私しかいないだろうからな。ロシアでは日本人扱いされ、日本ではロシア人扱いされる。少なくとも良い気分にはなれまい。」

「ミナミも、凛バディも、お前をよくバックアップしてくれているが、流石に限界がある。寂しくなったら、理解者の膝に休みに来い。悩みがあったらあまり隠しだてするな。その為に我々は“家族”になっただけだからな。」

「ダー！」

346 プロダクション本社 大会議室

「ではシンデレラプロジェクト第2期生選抜オーディションを開始する。」

まず最初に担当プロデューサーとして、志願してくれた諸君に対し尊敬と感謝の念を捧げるものである。ありがとう。

では本題に入ろう。以前通達しておいた通り、星条旗を歌えるようにして来るようお願いしたと思う。

が、一々確認するのは時間がかりすぎるのでこれは省略する。オーディションの中身をもう一度説明しておくが本日用われる面接そして第二試験、こちらは諸君に対して私が直接与える試練を自己中心的なことさえしなければどのような形ででも良いので乗り越えることを要求するものである。諸君の勇気と私を導けるといふ鋼の自信に期待するや切である。

申し遅れたが、シンデレラプロジェクト担当プロデューサー 兼 合衆国大統領付最高国防顧問のウィリアム・レッシュャーである。」

「よろしくお願いします！」

「正直に申し上げれば書類選考で大体は終わっている。つまりこの場にいる者は自分から辞退しない限りほぼ間違いなく合格ということだ。」

「!?!」

「ではこの面接の意味は何か？それは諸君の意思の強さだ。簡単に申せば、今から私は本気の殺気、つまりプレッシャーを諸君に浴びせる。5千人のイラク兵、テロリスト、部下を殺してきた老人の殺気だ。耐

えて見せたなら、アイドルに必要なメンタルの強さは、疑うべくも無い。耐えて見せろ。」プレッシャーを放つ

「!?!」立ちくらみを起こす

「面接は以上である。プレッシャーを受けて尚私を導く自信のある者は残るように。そうでない者は退出せよ。退出した者は辞退したと見なす。」

「では・赤城みりあさん、十時愛梨さん、久川颯さん、久川凧さん、姫川友紀さん、結城晴さん、脇山珠実さん。貴殿らを面接合格者として二次試験への参加を認める。宜しいか?」

「はい（OK）!?!」

「では最後の試練について説明する。アルゼンチンのパタゴニアで私と共に1週間サバイバル生活をして貰う。それだけだ。万が一回復不可能な怪我を負ったり死亡した場合見舞金を諸君ら本人かご家族の方に支払うので参加承諾書に署名し来週の成田空港での集合までに私に提出すること。サバイバルについては一人2kg未満、有機物以外は何を持ち込んでも構わない。質問はGmailで寄越してくれば対応するので連絡せよ。以上である。解散してよろしい。」

「ありがとうございます!?!」

「それと、結城さんと脇山さんだけはまだ残るように。」

「?」

「で、貴殿らだけに残って貰ったのには訳がある。まだ正式には通達

できないが、貴殿らには直ちに採用後の初仕事の準備に入って貰いたい。私が出ている大河ドラマ『徳川三代』の徳川義直 公 及び 松平信綱 公の役になる予定だった俳優達が病にかかってしまい空席だ。結城さんには徳川義直 公、脇山さんには松平信綱 公の役を是非ともお願いしたい。無茶は承知している。本来の報酬に加え個人からも報酬を出すので頑張つて貰いたい。」

「腹を切らせて下さい。身内じゃからと言うて手加減はできません。」

「しばらく！」

「諸大名の手前もあります。」

「恐れながら。」

「家光や忠長にも良い薬になります。」

「忠直卿はお勝様の妻にござります！」

「一向に構いません！」

「家康様は忠輝殿の罪を減じ改易に処せられました！」

「私は秀忠です！」

「不躰ながら、この儀は利勝にお預け下さいませ！」

「問答無用！」

「直ちに北ノ庄に使者を遣わします。今しばらくのご辛抱を！」

「利勝！」

「は。」

「半年！私は半年待ったんです！」

「何とぞ！」

「・えい！」脇息を蹴り飛ばす

「上様。」

「小指が。」小指を押さえる

「俳優経験の無いウツキに・よりによって徳川秀忠　公をやらせるのはどうかと思っただが、案外できておる。」

「ウイリアム演じる家康　公も中々上手かったよと思うよ？皆度肝を抜かれてたからね。ウチのクラスの子達も言ってたよ？『今の大河主演のレッシャー元帥版家康は歴代最高だった』って。」

「・そう言っただけだと私も頑張った甲斐があった。チハヤの土井利勝も中々上手くなってきたな。当初はグダグダだったが・。その点君の演じた大久保忠隣は全く危なげなく安心感があったよ凛。」

「ふふ。ありがとウイリアム。」

皆アイドル以外の仕事をマルチロールにこなせるようになってきたな。そろそろ志願者を募りパイロット適正のある者に訓練を施しブルーエンジェルス你真似事でもしてみたいものだ。

番外編 親子、盃を交わす

2023年11月22日 2100 池袋 レッシャーの別荘4階 お茶の間

「思えば、長い道のりであった。」
「は。」

「幼少の頃、父も母も失い、親戚の奴らに下に見られながら、お家再興のため、地べたを這うように辛酸を舐めてきた。」
「。」

「イラクで最初の相棒を死なせ、そこから私は失態を重ねて続けてきた。私の足は、500近い部下の屍と、5000を超えるテロリストの死体の上に立っている。そして、今までの失態への神罰なのか心ならずも、嫡男^{長男}信康を喪った。私はこの悲しみを、黄泉の国まで引き摺っていかねばならん。」
「。」

「できゆれば、書に親しみ、花鳥風月を愛でながら、穏やかな一生を送りたかった。だが、私は一ノ瀬の者として生まれた。一ノ瀬に生まれたなら、一旗あげたいと思うし、一旗あげたのなら、天下を取りたいと思うのも当然の事。天下を取るのは至難の技だ。私は人を脅し、人を欺き、裏切り、貶めてきた。血生臭い戦場を駆け巡り、時には謀略を持って人を葬ってきた。非情にあらざるば天下は取れん。」
「。」

「そちは私と同じ道に行くか、違う道に行くか。それは私にもそちにもわかるまい。だが、これだけは覚えておけ蓮太郎。人の上に立つ者は、心に一匹の鬼を飼わねばならん。」
「鬼を。」

「成り行きによっては、親や子も捨てねばならん。頼むべきは身内に非ず。忠義の臣と心得よ。」

「しかと、承りました。」

「そなたは若い。それ故に・教えてやりたいことなどいくらでもある。だが・私ももう・2年と保つまい。だからこそ忠義の臣も、友も、遺産も、多く残した。誇り高き我が祖父・我らが始祖、一ノ瀬金次郎の血を、そしてレツシャーの血を絶やしてはならぬ。私が残す者達の言葉をよく聞くこと、私がそなたに望むは、2つだけだ。後はそなたの思うまま生きるが良い。」

「ははっ。」平伏

「思えば、不憫よの。ウイリアム・レツシャーの子に生まれずば、かかる苦勞もなかりしものを。」

「滅相もない。」

「？」

「蓮太郎は、父上の子なるを無上の喜びと想っております。」

「^{継げ}注げ。」盃を渡す

「は・はい！」酒を注ぐ

「ほれ！」盃を持たせる

「はい！」ジューズを注いで貰う

——成り行きによつては、親や子も捨てねばならん！——

「父上・私にそんなことができるでしょうか・そもそも貴方がご存命の内に私が当主となり貴方や母上を切り捨てることもある・ということなのでしょうか・私にそのようなことをせよと。」

「蓮太郎。」

「母上。」

「またウイリアムパから何か言われたの？」

「人の上に立つ者の心得を教えてくださいました。」

「まだ5歳なのに早いつて。」 苦笑い

「母上。」

「？」

「何故父上は世継後継ぎに蓮太郎私を選んだのでしょうか？ 千早殿秀の嫡男殿は
勇氣と知慮の均衡に優れ、正之弟は私よりも人を寄せ付ける独特な力が
あります。千早殿忠の次男直とて、些か感情的なれど猪ではありませぬ。
何故特にこれといった長所の無い私を。」

「それは私が教えられることじゃない。ごめんね蓮太郎。でも、一
つだけ言えることがある。」

「？」

「あんたは私、渋谷凛の自慢の長男だつてこと。他の子達には無い力
があんたにはある。それを自分で見つけて伸ばしていけば良い。焦
らず、ゆっくりと。」 頭を撫でる

「微力を尽くします。」